○

イスラムの婦人は、家庭の内部の存在である。「内助」なる言葉は、イスラム婦人に端的にあてはまる。

家でも、近親者以外の人々には接しない。況して、本來から云へば、他人の男子に顔を示すことは、絶對に禁ぜられてゐる。

今日では、トルコとかイランやエヂプトなどでは、革新政策と政教分離が行はれて居る關係から、婦人の生活も亦、年とともに近代化の一路を辿り、今では、覆面や被衣は殆ど跡を絶つたといつていい。しかし、爾餘の回教諸國の多くは、依然として昔のままである。

頭髪も、女になると同時に、これを蔽ふのが風習である。十年まへのトルコ婦人は、短いヴエールのやうなもので頭を隱し、人が來ると、顔をも蔽ふたものである。この覆の下から隱見するほのかなる女の魅力は、デコルテで双肌をぬぎ、パーマネントで釋迦頭をふりまはす泰西美人よりも、遙かにゆかしく美しかつた。

ピエル・ロティや、近頃來朝したクロード・ファレールが、トルコの女と日本の女との禮讃者であつたのも、無理からぬことであらう。

これは、今から十五六年もまへの話であるが、イスタンブールで、私の先任者であつたU氏は、イスラム婦人の習慣を知らなかつたものだから、散歩の途中、向ふから來るトルコ婦人に時間を聞かれたので、立ち留つて時計を見ながら、ゆるやかに時刻を教へてやつたばかりに、遠くで見てゐたトルコの男に叱られた。この男は、また自國の女をも、「戒律を破り御國振りの美風を破る痴者」と罵つて、何處となく立ち去つたさうである。

またイランでの出來事であるが、土地の女の寫眞を撮つたばかりに、殺されたアメリカ人もある位だから、時刻を教へて罵られる位は、先づ已むを得ぬことであつたらう。

○

回教諸國にゆくと、家の構造が二部に區別されて居る。即ち、男子部と女子部とに明かに區別されて居る。

男子部をセラムルック（トルコ）またはアンデルン（イラン）と名付け、女子部をハレムリック（トルコ）或ひはビルーン（イラン）と呼んで居る。內と外との意味である。

ハレムといふと、世間では、なんだかなやましいもののやうに考へるが、事實はさうではない。なぜなら、ハレムといふのは、後宮三千の宮廷から百姓庶民の伏屋まで、同じく、婦人部

即ち男子禁制の意であつて、別に多くの妻妾がゐる意味ではないから。

ハレムに通つてもいいのは、近親——特に子女であり、他人は婦人と兒童とに限り、夫以外の男は原則として絶對に入室を許されない。

回教諸國を旅し、土地の知人などの邸宅に客として泊めて貰ふ場合に嘗める最大の苦痛は、入浴の出來ないことである。といふのは、浴室はすべて婦人部にあり、入浴したくても、絶對に足を踏み入れられないからである。

○

入浴の話が出たから序に、トルコの風呂のことに觸れよう。

元來が回教徒は潔癖で、沐浴垢離の「おきて」が嚴しい。用便、房事、經水、すべて汚れは垢離をとつて潔めなければ、神を禮拜することが出來ない。丁度日本の「大祓」の精神に似た氣分を、回教徒は過分に有つて居る。この關係から風呂が發達して來た。

「トルコ風呂」として歐米などで知られて居るのは、如何はしいものであるが、トルコの國内では、まともな浴場である。昔からトルコでは入浴が盛んである。ローマに於いても亦、古くは入浴は非常に盛んであつた。それがローマの末期になると、淫靡廢頽の風を生むに至つた。斯くて基督教は、淫風を一掃する爲め、入浴制限の方途に出でた。西歐人が今日尚風呂に入らず、不潔なのは基督教のおかげと云つていい。

回教徒は清潔を重んじ、局部の毛を剃る。それは風呂に入つたとき、流し男に剃つて貰ふのである。

私の部下に、今は亡きKといふ譯官が居つた。そのKが語つた述懷にこんな珍談がある。

まだ彼が、當時のコンスタンチノープルに留學生であつた時代のこと、風呂に入り、流し男に身體を洗はせて、いい氣持になつてゐた。やがてゴシゴシと音がするので、ハツと氣がつきよくよく見ると、重大な場所の毛が、既に半分ほど剃り落されてゐた。驚き且つ慌てて手を合はせて、あとの半分だけを助けて貰つた。

Kが笑ひつつ語つたこの珍談は、云ふまでもなく、回教國の風習を知らない爲めまき起された悲喜劇で、これと同じ奇譚は他にもあらう。

○

ハレムの風呂に、婦人が入るときにはさまざまの儀式があつた。

イランの記錄によると、「婦人は浴室の最初の戸を開けるときに、靴の踵で胡桃を二つ三つ踏

みつけて割らねばならぬ」とある。そこで、靴を脱いで入るのが、所謂「ワジップ」即ち「つとめ」である。また「この胡桃を燃した煙を、齒痛のとき患部にあてると立ちどころに癒る」との傳說がある。

池のやうにしつらへてある浴場で、最初は種々の香料を混へてある湯の中に身を浸すのである。婦人は、入浴しては滋養物を攝り、母乳のよく出るやうにするのが、「つとめ」である。湯から上ると、卵の黃味と「ホル」とか「ファオファル」と名付ける印度産の胡桃や種を交ぜたものを食べる。

婚禮の祝宴で點した蠟燭は、必ず一つだけ、浴室につけて置く「おきて（スンナット）」もある。これは、「生兒の生涯が、輝かしいものになる爲めに必要」なのである。

婦人が入浴するときは、下帶をつけたままである。但し、キーサ（山羊の皮でつくつた小さな嚢、これを手にかぶせて身體を洗ふ）と石鹼とを使ふときには、下帶を去つてもいいのである。頭髮は石鹼で必ず三たび洗ひ、脇の下は必ず脫毛するのが風習である。之れが脫毛劑としては、生石灰と砒素とを交ぜた藥品、「ヌーラ」があるが、若い娘は、脫毛劑を使つてはならぬ。またこの藥品を塗るときも、女友達にやつて貰ひ、自分の指では絕對に塗つてはならないのである。塗るときは、女同志は圓形に並んで、機嫌よく冗談を交しながら互に塗り合ひするのが、「おきて」である。

ハレム風呂では、女人は煙管を持つて水煙草をのみ、蒿苣（ちさ）や醋、煮もの燒もの、季節の果實、甘水、氷果などを運んで來て馳走をする。すべて、若やいだ朗かな心になつて湯を出るべきだとある。

「湯上り後は、特に派手な着物をつけて、友達なり愛人のところに赴くべし」と書いてある。このをり、途中で、好ましい美男子に會つた場合には、さりげなく覆面の端を外して顏を見せ、「おゝ暑い、汗ばんで胸が高鳴る」といつた表情で、男を惱殺すべきである。

以上のことどもは、イランの古典で、家庭訓女大學ともいふべき、「クルスム・ナーニ」に書いてある。

クルスムとは、いふまでもなく、豫言者マホメットの娘の名で、イランではこの名を採つて女の子に命名する例が多い。ナーニは、長老とか叔母さんの意である。この實在の老刀自を頭に五人の敎養ある婦人が、イラン女性の處世訓と家庭の手引とを遺したのが、クルスム・ナーニである。

戀愛の心得まで書いてあるところに「クルスム・ナーニ」の妙味がある。

○

結婚初夜の女人の心得は、特に面白い。

花嫁が寢所に導かれ、花聟は姑らくの間、侍女たちと待たされる。もとより如何なることがあつたにしろ、花聟たるものは、彼女たちと忸れ忸れしげに振舞つたり、またふざけてはならない。況してフラートは最大禁物である。

尙ほ花嫁の母親も、新婚の夜は來て居るのが「おきて」である。

花聟は部屋に入つて、花嫁の側に座を占め、嫁の右脚を聟の左脚の上に、右手を聟の手の上にのせて、女が上手に出ることを示すのが必要である。このとき聟は祈禱のため、二たびひれ伏さねばならない。そして洗盤と水入とが運ばれ、女の右脚と男の左脚とを並べて洗ひ淨め、手も同樣にする。これが終つて、聟は嫁に腕を貸して新婚の寢床に連れてゆき、彼女の頭から棉の種子を蒔き散らすのである。「この夜、雨が降れば、聟の前途は幸多い」と云はれて居る。

新婚の兩人は、香氣のある種子を口に含んで置くこと、また鏡とコーランとを見ることが、「おきて」であり、必要である。棉の種子を蒔くのは運勢を助ふ上に役立つ。兩人が寢室に入

るときには、あらゆる樂器で音樂を奏で、女たちは祝詞の詩を大聲で繰り返す。

この夜、美しい女が、花嫁の寢衣を運んでこれを投げつけるのは、夫に貞操を誓はせる「おきて」であるが、尤もこの女が醜女の場合は、これは斷じて禁物とある。新婚の兩人が一つの枕を用ふるのは、幸運と云はれて居る。

傳說によると、花嫁の實家より隨いて來た女たちは、新婚の部屋に兩人の入るのを見屆けた上、一隅に集つて、耳をすまして話聲を聽き、それを夜が明けたら、知友の人たちに言ひ觸らして歩き、噂の種を蒔くのが、この國の風習である。

○

新婚の夜、祈禱にふさはしい機會がないときは、祈禱を略しても差支はない。翌日は皆が集つて、樂を奏でて踊るが、嫁の晩餐は母親の家で、しかも屏風のうしろで仕度するのが、「おきて」である。當日は樟腦と薔薇水とを燒種と一緒に花嫁に與へると、男兒を生むとの傳說がある。

婚禮のとき、嫁の親戚は、必ず菓子の類を聟の家に贈る。

祈禱斷食等、戒律のやかましい回教徒が、花嫁にだけは至極寛大である。卽ち、四十日の

間、毎日五回の正規の祈禱が免除される。若しラマダンの斷食月に結婚すれば、特に祈禱も斷食も怠つていいことになつてゐる。シーア派のイランでは特にさうだ。何れにせよ、人間性を重んじたこの「おきて」は、まことに面白い。

○

最後に、回教の一夫多妻主義に就いてであるが、ハレムを充實して、一夫多妻が行はれたのは、遠い昔のこと、いまは僅かにその遺風が例外的にのこつてゐるに過ぎない。

「普通人が四人まで、王者は七人まで」妻妾を有つことが、回教國の若干では、いまも尙例外的に許されて居る。

しかし、すべての妻を平等に扱ふことが、その條件である。いまの世は、何處も同じ生活難が日增しに加はる時代だから、一夫多妻が如何にゆるされてあるにしろ、經濟的に見るときは禁止されたも同じである。

農牧の原始社會では、人手の多いほど生活の發展を意味してゐたアラビアである。從つてそこには、五人七人はおろか、何十何百人の妻妾を蓄へたものもあつたらう。マホメットは、この悪い傳統を打ち破るべく、數を制限し、條件を付けて、濫用を戒めたのである。

尙、回教法制には、私生兒のないこと、更にシイア派のイランでは、「シツケ」と稱する期限附の妻を認めて居ること等、異色ある法規と慣習とがある。例へば、旅に出て、三年間滯在する場合、その間だけの妻を有つ。考へただけでも獵奇的であるが、その妻との間に生れた子供は私生兒にならない。まことに彼等の誇る通り、ほんとの文明國がどこにあるか疑はしくなるのである。

イスラム傳說に於ける妖怪變化について

一九六

アラビア夜話の讀者は、しば〳〵惡靈、變化、天狗のたぐひに出逢ふ。尤も多く出るのはヂン(Jinn, 又 djinn, Jinni 女性となつて Jinniya などとも云ふ) アフリート (Afrit) グール (Ghul) であるが、この外にもアラビアの寓話やお伽噺のなかには尙無數に出て來る妖怪的存在がある。

日本や西歐の童話作者も語り手も、妖怪變化の存在を信じないで、話の中には盛り込むのであるが、アラビアあたりの童話の語り手は、極く少數を除くの外、悉くその實在を信じてゐる。例へばヂンと云ふ一種の妖怪は現實に生きて居り、極端に云へば社會生活の一員たる地位を占めて、さま〴〵の行動をするのである。

ヂンといふものは、恐らくアダム出現以前の存在であらう。卽ち神と對立するから惡魔でもあるが、今日のイスラム世界の取扱はむしろ天使と人間との中間の存在で、地位は兩者よりも劣等であるが、火から生れて人間でも動物でも怪物でも何の形でも取り得る。尙思ふがまゝに忍術を行つて姿を消す。飮食も生殖も人間と同じく、又人間と雜婚も出來、また死にもするのである。唯原則としては何百年でも生きるのであるから、恰も日本の天狗と狐とに似たもので、ヂンの傳說には天狗話に似たものが無數にある。

右によつてヂンの起源はイスラム以前のものたることは明かであるが、今日イスラム世界の通念では、主たる住居はカーフといふ山脈、卽ち全世界を蔽ふ連山の中に在つて、或るものはイスラムを信じ、或るヂンは信じない。此の不信のヂンたちがさま〴〵の惡魔なのであるといふ。序ながらヂンが火から生れるのに對し、天使は光から生れて罪なきものと考へられてゐる。

ヂンには善玉惡玉がある。善玉の方はアラビアなどでは大に尊敬されてゐる。例へばヂンは地球を通りぬけ、天空をも泳ぎ廻るから、何處に居るか油斷が出來ない。地上に水をこぼすときなど、アラビアやイランでは「デストウル」(お許しあれ) とつぶやく習慣がある。卽ちヂンに挨拶をするのである。

ヂンは亦川底、廢家、井戸、竈、湯殿などにも居る。我が國の河童にも似て居り、便所にも住むといふので、便所に入るとき同じ語を唱へる。亦井戸で水を汲むときもやる。便所のときはこれに更に祈禱の語を加へて、惡靈のいたづらに對し神の保護を求めるのである。我が國の

田舍などで、井戸、竈、便所に、盆や正月に御燈明や小さな鏡餅を備へる舊慣と何處か似たところがある。これも惡靈の存在を豫想しての行事と考へられる。

かくの如く怪奇を極めた神祕的存在が多數にあるが、アラビアの童話や寓話には、死人の怨靈が出たり、幽靈や人魂といふものに逢ふことは殆ど絶對にない。これはイスラムの信仰がイスラム以前の幽靈思想を滅ぼしたものでもあらうか。卽ち死人は死人の行くべきところに行つて居る、現世に戻つて來る理由は更にないといふのが、今日の通念であり、イスラム敎徒の童話に幽靈の出て來ない譯でもあらう。

此の點は不思議といへば不思議である。スメリアやバビロンの文學には幽靈が盛んに出て來るのみならず、之を宥める方策なども考へられてゐる。勿論今日のイスラムの通念には存在しないことながら、寓話や傳說に極く淡い形で多少の痕迹の殘つてゐるものは絶無ではない。

○

チンの外にアラビア傳說で民話や民俗の昔譚に出るものにシルーウァ (Si'lūwa)、デイユー (Deyu)、ダーミ (Dāmi)、セェイル (Seïr)、タンタル (Tantal)、タービーア (Tabi'a)、ウーム・エス・サビヤーン (Ūm es Sabyān)、カリーナ (Qarīna) 等がある。これらについて一々說明するのは煩しいから省略するが、著しいものだけを略說する。

シルーウァは西歐の妖精譚に出て來る魔女や食人鬼女に似てゐる。多くは水の精で川邊か流れに近い洞穴に住む。長い髮と膝まで屆く垂れた乳房とが特徵であり、幼兒を背に負うて乳を飮ませるとき、肩から乳房を投げてこれを與へる。身體は女人で、時には足がなく魚の尾のやうになつてゐる。

シルーウァは人肉を好み、中にも相思の男女を選んで喰べる。天使とは異なり生命は有限で、特に錢を恐れる性癖がある。ある學者の想像では、この妖精は恐らく古への河の女神の信仰と、アフリカ黑人の大猿についての種々の傳說とが混入して成立つたものであらうと云はれる。アラビア人が大きな猿類を惡魔扱するのは、前に述べたグールが、アラビア語でゴリラと同語であるのでも明かである。

ダーミも亦半獸的妖精で、塵や芥を喰べ、又人肉を好む。昔話としては西歐の狼の役目をつとめる。バビロンやアッシリアの古傳說にある惡魔と略同じもので、都會の近郊に住むと云はれる。

カリーナといふのは尤も不思議な魔女で、人間の男を慕ひ、その妻や婚約の女から引離さう

とし、時には此の男の子種を宿し、兒を産むのである。獨身の男は時にはカリーナを妻に娶ることもあると云ふ。アルメニアの民俗傳說に「アル」と呼ばれるものがこれである。男が愛慾の夢を見るのは、カリーナの所爲だと說く。極端な嫉妬心を持ち、カリーナの愛人の愛を奪ふやうな女性が出ると、之を傷けずには措かない。又幼兒を盜んだり殺したりする。或學者の說では、これは正しくバビロン傳說のアルダット・リリーの直系の後裔であるとのことだ。

○

イスラム傳說に出て來る妖精の物語は限りもない。中には詩味の豐なものも多い。イラークやイランに行はれてゐる童話などは、アラビア夜話の材料にもなつたと考へられる古いものがある。

十二世紀の詩人アル・サラーヂの愛慾長恨集（Masá ri'al 'Ushshâq）とも云ふべき書の中にある一話を擧げてこの拙稿を終ることとする。

○

アブダラー・アル・バヂアリ語つて曰く、

トゥスタールの街がイスラム教徒に征服された頃、私は此の街のさる通りに居て、信仰の言葉を唱へた。

『アルラーに於ての外に力もなく權勢もなし。アルラーの欲したまふことは起り、その欲したまはぬことは起ることなし』

そこへ通りかゝつたあるイラン人の族長が之を耳にはさんで、『この言葉を聞いた最後は上天から直接に出た言葉として聞いた』と云ふ。私が說明を求めると、次の話をして呉れた。

我等の仲間に一人の男があつた。（彼自身のことである）ホルムーズ帝の息ホスロウの宮廷に官命を奉じて派遣された。彼の留守を見て惡魔が彼の形になり、いつの間にか彼の妻と同居してしまつた。彼が家に歸ると、妻は長途の旅から歸つた夫とは知らず、惡魔を元のままの夫と思つてゐるので、彼を少しも歡迎しない。そこへ惡魔が現はれ、二人交替に夫たる役目を果たすか、之を拒むなら彼を殺すと詰め寄せた。詮方つきて彼は惡魔の提案に同意した。

ある日また惡魔が來て、自分は上天にある天使の言葉を聞くのだが、若し望むなら同伴してやらうと云ふ。彼は夜になると惡魔の言ふがまゝに、その背に乘り、頂（うなじ）に生えてゐる猪のやうな鬣（たてがみ）にしつかりつかまつて、放せば即時に命を殞すと彼の警めたのを守りながら長驅するに任せた。やがて天國の郊外に著いたらしく、聲あつて、

『アルラーに於ての外に力もなく權勢もなし。アルラーの欲したまふことは起り、その欲したまはぬことは起ることなし』

と唱へられた。惡魔は聞くと大に狼狽して爲すところを知らず、自分もろとも樹木の繁る林のただなかに墜落した。

朝になつて自分は家に歸り、此の語を胸に祕して、惡魔の來るたびに之を唱へた。その都度彼は同じやうに狼狽した。更に年を累ね、この呪文をつづけてゐると、遂に彼は再び來ないやうになつた。

○

妖精の戀、狐狸の愛慾、蛇性の淫などを取扱つた支那日本の物語も、或はイスラム以前から、これらの國に行はれてゐた傳說に胚胎するものであるかも知れない。西歐南歐に傳はる邪視(Jettatura)の傳說、之を防ぐ呪ひ（木製のものに手を觸れるなど）又は呪文なども、この邊に根據を持つものかと考へられる。

これらは民俗や傳說の研究者に面白い材料を提供すると同時に、今日の回教圈に於ける主要民族の心理的研究ともなるのである。

イスラム文學の展望

イスラムの發生以前に、アラビア沙漠の部落民が、何の文學をも持たなかつたと考へる根據はない。現にこの時代に、アラビア人の好んで用ゐた文章の一形式に「サッヂ」と稱せられるものがあつた。これは別に形式的の特殊の韻を踏んだものでもなく、その韻律もはなはだ不明瞭なものであるが、隨處に興につれて韻をふむ、謂はば散文と詩との中間の文學であつた。

この形式がイスラム以前に盛に用ゐられ、時としては、濫用された證據には、コーランにおいてマホメットはこの形を用ゐることを禁じ誡めてゐるのである。後に說く通り、例へばコーランの中にマホメツトの言葉として『異端のカーヒン族の樣に「サッヂ」を話すか』といふ文句があり、又祈禱にこれを使ふことを禁じたりしてゐる。然し嚴格に云へば、コーランそのものが顯著なる「サッヂ」式の實例であつて、ことに古い時代の「スーラ」は全く豫言者のいましめたカーヒン族の使つたものと同じ形式である。

學者の說によると、ベドウィン族の中に傳統的に斯の如き若干の不規則な韻をふんだ散文體があつたので、これが益々發達してイスラム文學にも盛に用ゐられ、今日に於てすら盛にこの式が彼等の文學に混入してゐる。西歐人がイスラムの文學を餘りその趣味に合ふものと考へないのは、恐らくこの誇張されたサッヂ式文學を好まないためではあるまいかと思ふ。これは恰も我が國の和歌にある枕詞のやうな、意味の殆どない言葉が口調と音律のために使はれた形式に甚だしく似てゐるが、後代のペルシア文學にも、正しくこの式を用ゐてゐる實例が多數ある。

アラビア人の古代文學として殘つてゐるものは大體韻文であるが、その古詩の最も古いものでも、西紀五百年を遡らないと云はれてゐる。イスラム以前に詩の存在したことは、アラビア人の秘かに誇りとするところであるが、その實例として殘つてゐるものは、如何にも傳說に囚はれた型にはまつたものであり、今日でもイスラム文學に多くある樣な形式的な比喩に充ちてゐる。

アラビア韻文の起源

イスラム文學の韻文は、アラビア語で一口に「シール」と呼ばれてゐるが、これが前に述べた「サッヂ」と密接な關聯をもつてゐるのはいふまでもない。そしてこの韻文の起源はやはり駱駝使ひか騎手の歌から出たものであらう。

シールの意味についても興味のあるのは、この語は詩人を指して「シヤ・イール」と呼ぶのに關聯して居り、この語の意味は常人の及ばない特別の知識をもつた人間で、不可知の精神的勢力の集つた集會に參加する超人の意である。これがアラビア人の詩についての觀念を如實にあらはして居る。

この形式の文學に「ヒッヂヤ」と稱するものがあり、通常「諷刺」と譯するのであるが、これは適譯ではない。この種類の文學は敵を精神的に攻撃して武力を補ひ、超自然的勢力を賴んで敵を呪ほろぼす一つの詩形である。そしてこれを誦する場合には、象徵的な動作をともなふものであつたといはれてゐる。この點で、祈禱や呪文に「サッヂ」を用ゐたと同じやうに、一つの超自然的な力を呼びおこす目的を持つてゐたやうである。然し時代の進むにつれて、詩の魔術的效力を段々信ずるものがなくなつて行つた。

アラビアの詩は形式から言へば韻律と押韻とである。一つの例外卽ち「ラッヂャーズ」を除けば、韻律はすべて二行づつで、押韻は最後の言葉にあるだけである。韻律も數量的であつて

長短の語を流用することも許され、又長短何れにも用ゐ得る語もある。又短音語が二つ續けば一語の長音と同じに扱はれる習慣もある。イスラム以前の詩人は十五韻律を用ゐたが、後代になつて更に加はるものが出て來た。然し長詩には「ラッヂャーズ」は用ゐない。大體この原則による規則正しい韻律以外には用ゐられなかつた。押韻は三綴りにも及び得る規則であり、一般にアラビアの詩は二行毎にいつでも同じ押韻をすることもある。詩の形は「カシイダア」——一つの音律と一つの押韻で出來てゐるもの——で三十行乃至百廿行位の詩であるが、この名稱の起源は明かでない。今も現存してゐる「カシイダア」の斷片は恐らく初めから斷片にすぎなかつたらうといはれてゐる。「カシイダア」の内容は大抵、沙漠のただ中で、いはゞ野營のテントを張る漂泊民族の戀を語る場面が最も多くうたはれてゐて、その後に一日の駱駝の旅行が續いたり、又夜になつて沙漠を渡つたり、獵をしたりする風景を書いたものが多い。さうして詩人の屬してゐる酋族の武勳を語つたり、又詩人自らの武勇傳等を題材にしてゐる。

詩は生れ出るのであつて作るのではない。詩人が内にあふれる感情を、アラビアではこの形で表はしたにちがひないと考へてゐる。後になつて「カシイダア」は一定の規則が出來、又題

材にもきまつた樣な形が出來、英雄禮讃をもつて終るやうになつた。人生の見方が詩にあらはれたところでは二つしかない。一つは酒を飲んだり、賭をしたり、酒を注ぎ歌を謠ふ女に贈物を與へたり、そしてその酋族の寬厚な美德をそなへてゐる評判を歌つたりする方面であるが、今一つは、酋長がまづしきものに惠み、酋族の名譽を守るために憤然として武器をとるやうな方面である。アラビア人はいつでも戰ふ勇氣をもつてゐるが、必ずしも死を恐れるのではないが、死を急ぐものではない。このことは少しも恥らふことなく歌はれてゐる。また人生の無常、死の必來を平凡に扱つて道德化する詩が相當に多いのである。

詩の一種に「ラーサー」即ち挽歌が、別に大した理由もなく特別のあつかひを受けて居り、形式は全然同じ詩であるが、他の詩のやうに起句に愛慾の題材を入れないのが異なつてゐる。そして死者に對する悲しみを述べ、又若しその死が不慮のものであつた場合は、復讐を叫ぶやうな内容をのぞけば、他の詩と何の異なるところもないのだ。そして婦人が挽歌を相當に多くつくつて居り、又それで有名な女の詩人も殘つてゐる。イスラム前後のアラビア人の生活には、宗教は大いなる役割をもつてはゐなかつたものらしく、微溫的な宿命觀がその宗教的感情の極限とも云つてよいのである。

アラビアの詩は一行毎に完全な一文章であり、これを集めて詩が重なり合つて出來上る。從つて思索的な分子、暗示的な留保はアラビア文學にはない。記述的なものであるが、その記述は簡素なものにすぎない。ただその結果は往々にして寓話的なものが多い。起つた場所、出て來る動物等の詳細な點を、ことごとしく記述するので、時としてはアラビアの詩は韻をふんだ地質學であり、又は解剖學であることすらある。飜譯も難かしく、又譯をしても興味がない。

又他方では物の云ひ方をつよめて、結果はかへつてグロテスクな場合がある。例へば婦人の指を木の枝に譬へたりするのはその例である。當時の詩人は大抵ベドウィン族であつたが、その他にも町の住民として知られる詩人があり、この非ベドウィン的の詩には、韻律も題材もちがふ場合があるが、詩の形からはむしろ散文的なものが多かつた。傳說によるとメディナの市民には寓話を書いたり、歷史的の傳說を歌つたりしたものが多かつた。尙アラビア語で詩をつくつたのには、ユダヤ敎徒も耶蘇敎徒も居つて、當時一の祭禮で、詩人の歌合戰が行はれたことも記錄に殘つてゐる。

ベドウィン族の詩は口傳で殘つてゐるに過ぎない。詩人が自分でその作品をうたひ、そのあとで職業的な讀詩家（ラーウイ）がこれを讀む。詩人がこの讀詩家の職業から始まつたものも多い。そのためにアラビアの詩といふものが果して純粹な意味の作詩であつたか疑問がある。イスラム以前百年位までには書き殘されたものは恐らくなかつたのであらう。

人間の記憶力には限りがあり、ことにアラビア語の特徵から見れば口傳が段々變つて行つたのは疑ひを入れない。斷片的なものでは、章句がたびたび姿をかへ、又同じ詩でもいろいろの異本があるのは當然のことであるが、後世學者がイスラム以前の文學の殘存したものを集めて、一定の定本を作つては居るが、恐らく何れの詩でも僞作もあり、想像による讀方もあるとみてよからう。ただ不思議なことは、詩人の使つた言葉はアラビア半島を通じて一個の國語であつて、方言的な異同は極めてわづかに存してゐるだけである。學者はアラビア語にある單語の無數に豐富なわけは、限りない方言から樣々の言葉をとつたためであらうと云つてゐる。日常語がだんだん詩に使つてゐる言葉の屈折、高低を消滅させるやうになり、今日のアラビア近代語になるまでに、かかる變化を多數に經たものと思はれる。

イスラム以後のアラビア韻文學

イスラム時代になつて、非常な變化がおこつた。主な原因は勿論宗敎である。コーランの敎

では、詩を惡魔の玩具と考へたのがその證據である。然しその他にも情勢の變化がはげしかつたのである。イスラムの勃興と共にアラビア人の興味の中心はアラビア以外に動き、沙漠の生活がむかしと同じやうな感情をよびおこさなくなつた。沙漠に住んだものでなければ沙漠の詩は解らない。勿論當時の詩の中には、昔の通り最後にカリフを讃へ、又序説に戀愛の場面を入れたりしたものがあつたが、この傳統的の形式は段々止んで、終ひには詩は一個定つた目的の題材を取りあつかふやうになつた。愛とか哲學とか宗教とかいふものがそれであつた。

一詩一押韻の主義は相變らず尊重され、或る詩の如きは同じ押韻で七百行も續いてゐる。これが變るまでには數世紀もかかつたのであつた。傳説によると、ハルーン・アル・ラシッドの時代に、或る奴隷の娘が大衆の日常語で詩をつくることを始めたが、當初は學者等はこれを詩とは呼ばなかつた。併し段々それが時流にのるやうになつた。このスタイルを「ラフン」と呼び、スペインではサラセン時代には單詩で「ザヂヤル」といふ文學的の地位にまですすめられた。この式がさまざまに形を改めて、各詩に一つの韻律、一つの押韻の主義が變つて、新しい形の詩が現はれた。

不思議なことには、スペインでは土地の詩人がいつでも昔のままの詩形をとり、わづかに押韻を工夫したが、さすがに題材はアラビア人よりも、歐洲人に味のあるものをとつた。當時のスペインでサラセン時代に作られた詩の、騎士道のロマンスを想はせるやうな戀愛の見方と、自然美に對する感受性は、殆ど近代的ともいふべき域に達してゐる。

イスラム傳説によると、アラビア人は當時でもまだ韻律の理論を知らず、これを發見したハリル・ビン・アハマッドは、たまたま鍛冶屋が金挺子（てこ）をうつ音を聞いて、その理論を悟つたと云はれてゐる。しかし詩といふものは尚暫くは文句の問題、記述の細密にわたる技巧の問題等に終つてゐた。これを評するものも、その觀點は同じであつた。この意味では近代のアラビア文學にあらはれた詩でも舊套を脱してゐないのが多い。特にアラビア語の詩といへば、殆ど今日は死語に類する文句を主としてゐるのである。

ペルシア文學は、自（おのづ）らイラン人種の昔からもつてゐた藝術性に基いて、アラビア人から韻律を借りたけれども、その題材も詩形もイスラム當時のアラビア詩よりもずつと發達したものであつた。イラン固有の詩形の中には「マッツナウイ」とか「ルーバイ」とか「ドウバイ」等といふ詩形があつて、それぞれその特質をもつてゐるが、今日ペルシアの詩として殘つてゐる最も古いものは西紀約九百年頃のものであり、その用語も詩形も爾來格段な變化をうけてゐない

のはまことに特異とすべきである。ペルシア詩人については尙後段に詳しく述べよう。

トルコ、ウルドウの詩は概してイランの模倣であつて、ただウルドウは印度的の影響を若干うけて居り、特に後世になるほどこの影響は甚だしいのである。トルコについては後段に略説しよう。

コーランの文學的地位

イスラムのあらゆる源泉が、豫言者の啓示を受けたコーラン（眞の發音は「クーラン」に近いが、今は通稱に從ふ）に在るのは、明白である。今日でも三億に近い人間が、これを神の言葉と崇めてゐる。從つてイスラムの文學も、自（おのづか）らコーランの思想、コーランの言語の絶大な影響を受けたことは論を俟たない。コーランを離れてイスラムの文學を語ることは不可能である。

マホメツトは、天使ガブリエルを通して、直接に神の啓示を受けたことになつてゐる。豫言者としての二十三年の生涯の間に、この啓示を受くるに從つて、弟子の前で之を誦し、弟子が之を記憶して文書に殘したものが卽ちコーランである。「コーラン」の原義は、「聲を出して讀むこと」で、時に「アル・コーラン」といふ「アル」は定冠詞である。

マホメツト時代のアラビア沙漠の文化の程度では、文字を書くことは相當の教養を示すのであり、史家の通説では豫言者自らは恐らく讀み書きは出來なかつたらしい。從つて文明人種よりも遙に記憶力は强く、マホメツトの生きてゐた時代にも、弟子のうちには、コーラン全部を暗誦したものが多數にある。今日でもこれの出來る人を信徒間の名譽稱號として「ハフイーズ」と呼ぶのである。

コーランはマホメツトの當時に、今の形を取つたのではなく、イスラム勃興の初代の戰亂で相當散佚したのを、豫言者の書記官長格の「ザイド」が蒐めて、『棗の葉や白い石片や人間の胸に畫かれてあつたもの』を編纂したのである。その後にも二三句整理を加へ、今日の公定版はオスマンのカリフ時代、卽ち西紀六百四十四年から六百五十六年の間に、出來上つたのである。

コーランが當時の尤も完全なアラビア語で書かれてあるのは、古今を通じて認められた事實である。これはクレイシュ族の方言で、恰も欽定版の英譯「バイブル」が英文學における全く同樣の地位を占め、後代の文學に大きな影響を與へてゐる。英譯聖書は勿論飜譯で、中には多數の誤譯があり、モーゼやイエスの喋つた言葉ではないが、コーランはマホメツト自らの語つたもの、そのままであるから、世界の經典のうちで全く獨自の地位を占めてゐる。

コーランの教義はここでは問題でないが、偶像を排して、唯一神を崇むる福音が、一種の押韻のある、前に述べた、イスラム以前からある「サッヂ」の式の散文で書かれてゐる。表面から詩や文學を忌避したマホメツトは、却つて滿腔の磊塊を注ぐに、叙情詩的の宏壯卓拔な文章を以てしてゐる。これは炎の如く燃えた論理であり、魂から湧き出た眞の詩であり、文學である。

バイブルに出る、世の終り即ち最後の審判についての記事は、いづれの國語でも相當に名文である。コーランは素よりその影響を受けたもので、更にすぐれてをり、アラビア語を解しないものでも、その力强さに打たれる。意味だけを示すと、

大空の引き裂かれむとき
星くづのうち碎かれむとき
海原の塩の破れむとき
墓石の發かれむとき
靈は知るべし、その爲せること爲さざりしこと

人よ、などかその恵の主に叛く
汝を創り、汝を整へ、汝を裝ひし
主はいづこにありや
その思ふがままに像りし主
いな、汝は審判の日を信ぜず
誠に知れ、汝の上には記錄者あり
汝の言動一として免るるものなし

コーランの章句の旋律と音調とを味ふには、是非ともアラビア語の原文を正しく發音する人の口から聞くの外はない。（コーランについては岩波新書拙著『回教徒』參照）

アラビア文學の隆興

アラビアに眞の文學が起つたのは、第八九世紀からである。前に述べた詩と散文との中間文

學が漸く分岐して、社會生活が複……となり、沙漠の趣味からや〳〵典雅を尚ぶ敎養が擴まるにつれて文化も益々多樣になり、文學としての散文も詩も判然たる存在になつたのである。併しイスラム隆興の初代は、被征服者たる——例へばペルシアの優越な文化に忸れて競れて之を飜譯したものが多く、後には歷史や童話として、後世に傳へた散文が現はれ、爾來アラビア文學の古典として殘つてゐるものが多い。

當時行はれた散文體には、前に述べた「サッヂ」の愈々發達を遂げた形式で、押韻散文の標本とも云ふべき、「マカーマット」（集會の意）といふものが行はれた。これは一種の座談會文學とも云ふべきもので、一人の風流人が現はれて、その頓智と雄辯と學識と詩才とで、列席の文士たちを批判するやうな、記錄の體裁を採つた文學である。ハリーリの「マカーマット」が最も後世に傳へられて名がある。

つづいて大衆小說、歷史小說、コントの連鎖體のやうなものも行はれ、「夜話」の起源にもなつた。恐らく遠くギリシアのイソップ物語なども關聯があるだらう。ラクマンの作として傳へられる寓話が今でも世に行はれてゐる。

時代別に云ふと、ウマイヤッド王朝時代には、プラトニックな愛を題材としたものが、一世を風靡し、此の流を汲むものには婦人のうちにも一流の詩人が出た。ハンサーだのマヂヌン・パーニなど世に現はれた。又詩形としてはギリシアの「イヤンブス」に當るもの、卽ち短長格又は抑揚格の形式が此の時代に起つた。

アバシッド王朝がイスラム文化全盛時代であるが、就中、第八世紀の末、ハルーン・アル・ラシッド大王に至つて黃金時代に達したと云はれる。併し此時代のバグダッド王宮の雰圍氣は、いちじるしくペルシア的であり、文學も極端にその影響を受けたので、果して獨自のイスラム文學と云ふべきであるか、甚だしく疑問である。

大王の兒、マムーンの治世には、世界最高の文化は、藝術、科學、文學、醫術を問はず、あらゆる智的業績の部門がアラビア語を通じて學ばれ、中世の暗黑に失はれたギリシアの藝術や哲學も、アラビアの光を通じて再檢討されるの外なかつた。ここに歐洲はアラビアに膝を屈して敎を乞うたのであり、「光は東より」來たおかげで、歐洲に科學も哲學も亡びなかつたのである。當時の知識階級は、回敎徒たると、ユダヤ人たると、基督敎徒たるとに論なく、アラビアの敎養を貪るが如くに渴き求め、カリフの宮廷では、汎く學者を迎へ、あらゆる歷史や哲學の古典は悉くアラビア語に飜譯されてあつた。

イスラムの征服圏を增すと同時に、異民族にコーランを敎へる爲めの論理や文法や歷史が學問として發達し、次いで版圖の擴げらるるに從つて、地理の研究が進められた。イラン、中央アジア、印度、支那に及ぶアラビア人の旅行記や地理の叙述は、今日に至るまで世界の學者に貴重な資料を殘してゐる。他方アラビア夜話にあるシンドバッドの航海冒險の物語も、當時のイスラム敎徒の地理慾を示すものとして、興味深いのである。

天文數理に通じてゐた爲め、曆の修正を屢々行つて居り、此の時代の世界の數學は全くアラビアに獨占されてゐたのは、今に顯著な事實である。

此の時代に詩人としては、アブー・ヌウアスが全盛であり、詩韻も自由で、アナクレオン式の題材が專ら行はれ、人生に徹する深さとか、獨創の思想といふよりも、韻律の華麗、比喩形容の面白さを尙ぶので、文學としては形式美を重んじたものであつた。唯此の時代の舊套を脫したアブル・アタヒーヤといふ詩人は、時代の俗語で人情の深味に觸れた詩を作つて、後世に殘つてゐる。

イスラム黃金時代の文化は、サラセンの西歐征服と共に、遠く西の方の舊ラテン文化國に及び、中にも七百年回敎徒に國土を占領されたスペイン、ポルトガルに及ぶもの多かつた。學問も藝術も、スペインでアラビア語を通じて保存され、文學は西歐の情趣を攝取し又同化されて、漸く舊形式を脫し、自己を表現するものとなり、詩人も作家も一種の東西文化の融合を試みる結果となつた。南歐プロヴァンサルの詩は多分に此の時代のイスラム文學の影響を受けてをり、同じくイスラムを信ずるエヂプトには十二世紀の末に、悉くその文學的勢力が及んだのである。

第十世紀以降のペルシア文學

カリフの王朝政治が漸く衰へて、蒙古人來寇に至るまでの三百年ほどの間は、ガズナ、セルヂュク、ホワリズム（花剌子模）等のトルコ族が天下を取つたが、イラン人は此の異民族の下で、徐々に獨立を取りかへし、ペルシアの文學藝術は、實に此の時代に一つの黃金時代に達したのである。それはカリフ時代のアラビア文學といふものも、前述の通り、傳統的に優秀な文化を持つてゐたペルシアの文人藝術家に負ふところが多く、征服者の言語であつたアラビア語は、カリフ王朝の衰へるにつれて、イラン語の復興に席を讓り、イランの學藝界には無數の天才が輩出して、文運の極盛を見たのであつた。

前記の異民族の王朝も、悉くすぐれたイラン文化を受け容れて、學藝は素より、庶政民生の

詳細までがイラン化したものであつた。

今日西南アジアは勿論、遠くパミール、トルケスタン、印度、アフガンの境に至るまで、文字あるものは悉くイラン語と、その文學を愛好すること、歐洲におけるフランス語に優るとも劣ることなき現狀であるのは、此の時代のイラン文化の華の、いかにすぐれて唉き誇つたかを如實に語るものである。

イスラム傳來の千年も前に、イラン人は詩も文學をも持つてゐたことは疑を容れない。唯不幸にも完全な形で殘つてゐないのだ。

イスラム以後では、第十世紀の前半にルダーギあり、後半にアル・ビルーニやアヴィセンナがある。前者は「インデイカ」や「古代國民史」を書いてゐるが、如何なる歐洲人の作品と比べても、遜色のない傑作である。

アヴイセンナはアブー・アリ・ビン・シーナのラテン名で、ブハラに生れたペルシアの文官の子であり、十七歲にして早くも名醫として名を成した。ギリシアの醫學哲學に精通し、その著述は東西兩洋に永く古典として尙ばれた。その業績の多くはラテン譯で今に殘つてゐる。即ち西歐は悉く彼に學んだことを示してゐる。

イスラム文學に殘る最大の詩人は、云ふまでもなくペルシアのフイルドウシーであらう。彼は本名をアブル・カシムと呼び、西紀九三二年頃ホラサンのトウスに生れた。これは今日のメシエド市の北方二十キロメートル程にあるフアズである。

フイルドウシーの大作として今に殘るのは、「シヤーハ・ナーメ」である。「列王詩傳」とでも云ふべきものだ。卽ちイスラム以前のイラン皇帝の傳說的事蹟を、六萬首に上る敘事詩の形で書いたものである。當時ガズナ王朝のマハムード帝にこれを献げたのが一〇一〇年である。帝室の待遇が面白くないので、彼は貰つた賞金を風呂番と水賣とに分けてやつて、飄然として西の方に赴いて餘生を送つた。傳說によると、後に印度に入つたマハムード帝が、此の大詩人に酬ゐることの淺かつたのを悟つて、詫の言葉と六萬金（約金貨三十萬圓に當る）——卽ち一首に一金ディナルを贈つたが、これを載せた帝室用の駱駝がフイルドウシーの鄕里を通ると、恰も世を去つた彼の遺骸がその行列と出會つた。彼の娘は父の遺志を守つて、斷じて大詩人の値を知らなかつた王者の賜を受けなかつたと傳へられてゐる。

フイルドウシーの大作は、これより約三百年程前のササン王朝時代に、時のイラン語卽ちハラヴィ語で書かれた列王傳說に基いて、時代のイラン語に書き直したものである。イランで

名のある密畫は、多くは彼の詩の挿繪のやうなもので、文藻の豐かさと、音調の流麗なことはホーマーを凌ぐと云はれる。

數年前、現帝レザ・シアは世界の東洋學者を招いて、フイルドウシーの千年祭をテヘランで催されたが、此の千年の間にイラン國民は、如何ばかり彼の詩によつて自國民の祖先が遺した史上の偉業に感激し、國民の優越性を自覺させられて皷舞を受けたらう。今でも文學の素養のあるものも、ないものも、イランではフイルドウシーの名句を記憶してゐないものはない。筆者は、學者や藝術家のこれを論ずるのは勿論、自家の從僕や馬丁までが屢々會話の間にこれを引用するのを聞いた。そしてその都度美辭麗句の音律に自ら醉へるが如き彼等を見出して、國民的大詩人の後世を動かすの偉大さを知つたのである。

フイルドウシーに續いて現はれたのが、オマル・ハイヤムである。第十一世紀の初、セルヂユク・トルコ族が中央から西南アジアに君臨した時代の詩人である。彼はペルシアよりも寧ろ西歐で知られ、特に英國文人にはフイッジエラルドの自由譯ではあるが、名詩として傳へられてゐる。イランのニッシヤプールで生れ、父の業が天幕製造だつたので、今でも彼は天幕と詩とを作つたなどと誤傳されてゐるが、彼は學問を修め、特に天文學曆學に通じ、マリック王の名相ニザムル・モルクと同窓であつた緣故から、王の建てたメルヴの天文臺に勤務した。曆の改正には彼の業績が殘つてゐるので、今日でもイランでは、ハイヤムを詩人と云ふよりは、天文家といふ方が解り易い位である。

筆者はロンドンで、イギリスの詩人文士の仲間に、オマル・ハイヤム・クラブへ招かれたことがある。これは酒を飮み女を語るクラブで、ハイヤムの詩の精神に合致してゐるのだが、今から六、七十年前にイランのナスレディン帝に當時の英國公使が、ロンドンの此のクラブの話を申上げると、ペルシアにはハイヤムより優れた詩人は無數にあるのに、何故千年も前のハイヤムを悅ぶのかと言はれ、例へば余の如きも……と語を繼いでその儘默されたと傳へられてゐる。それほど英米には影響を及ぼしたが、散文的な英國人の頭には、夢幻的神秘的でニヒリステイクでさへあるハイヤムの四行詩（ルバイヤット）は、驚異でもあり淸涼劑でもあつたのだらう。

ハイヤムの思想はイスラム的ではない。先づ人生の意義を疑ひ、その無常を悲しみ、人間の爲すことの果敢なさを感じ、切々と胸を抉るのである。

我れ世に生るも、天地に何の齎すものなし

我れ世を去るも、天地の美と大とに變りなし
何人も大なる謎を隱す幕のうしろを見る能はず
この形骸の下に生くるものを誰かは知るべき

この極端な懷疑と悲觀と絶望とを、醫やすものは酒であり、愛慾であり、風月と花とであつた。

甘酒を飮めよ、醉ひしれて塵の身ながら
樂しくも永く眠らん、友も女も親も子もなく
此の祕言をとはに人には語らざれ
一たび褪せたるチュリツプの再び花さくことはあらじ

オマル・ハイヤムは遺言して、自分の墓は一年に二度も花さくところで、花びらの落ちる地點を選べよと云つたが、今日ニシヤプールにある彼の墓所は、正しく古院の一廓の花園の中にあつて、梨子や桃の花が、雪の如くに彼の骸を納めた白石膏の碑の上に降りかかつてゐる。

ホワリズム（花刺子模）王朝から蒙古侵入時代にかけてのイランには、ニザーミー、アッター ル、サアデイ、ヂヤラル・アル・デイン・ルーミーの四詩人がある。此のうちイスラム文學史上の大きな名であるニザーミーとサアデイとについて略述しよう。

ニザーミーは十二世紀の後半にアラブ・ペルシアのロマンチックな題材を詠じた詩人で、中にも「メジヌーン・レイラ」の戀物語を扱つたものが後世に賞せられてゐる。これは譬へて云ふと、ロメオとジュリエットの先驅をなすやうなもので、種族の違ひから悲戀の生涯を送る物語である。此の外にホスロフ、シリニの戀物語もその麗筆で殘つてゐる。此の詩の內容は曾て拙著『沙漠の國』に詳しく書いて置いた。

サアデイはペルシア最大の詩人と稱せられ、フイルドウシーよりも、又後に述べるハフイーズよりも、數々の點で優位に置かれてゐる。西紀一一八四年（一說に一一九三年ともいふ）シラーズに生れたイラン人で、本名をムシヤリフ・ウ・デインと云ひ、バグダッドに學び、シリア、アラビア、小アジアなどに足跡到らざるなく、約百歲でシラーズに死んだ。詩集の大著は、ブ

スタン（果樹園）グリスタン（薔薇の庭）であるが、イスラムのうちでも神秘的なスフイスムの信徒であるサアデイは、此の詩の中では、微笑みながら道を説く人道主義者である。併しその哲學には權衡の取れた樂天主義に、絶望に達せぬ程度の憂鬱が適度に按排され、その基調は甚だしく人間味に富んだものである。此の觀點から西歐に類例を求めたら、ローマの詩人ホラチウスが最も近いであらう。

サアデイは斯くの如くイラン文學上のヒューマニズムを代表し、輕い皮肉と深い叡智とが交錯しながら、イラン人の人生を如實に現はしてゐる。

君と我と、ある日、野邊に相見（あひまみえ）て
君と我と、ただ二人だけ、街に出で行く
君と我と二人の外、人しなければ
君と我と、共にありていかにうれしき
かほど樂しき折はあらじ

（四行詩より）

此の夜、我が友を胸にいだきて
眠りに醉へる彼女の眼に見入る
我は云ふ——
なよなよせるいとすぎ、愛するものよ
いまは眠るべき時にはあらじ
歌へよ、我がうぐひすよ
汝（なれ）が唇を開け、うばらの蕾の開くが如く
眠るな、わが心のときめきの主よ
我は欲す、汝（なれ）が唇より流るる愛の甘酒（うまざけ）
久しく聞く、汝（なれ）が友（女）汝（なれ）に語る
彼女（かれ）は未だ何人にも許さざりきと
かくて彼女（かれ）はその生涯を語りつつ
汝（なれ）にこれを證（あか）す數々の人の名を告げぬ

（アスタンより）

汝(れ)これを聞いて微笑む、そは汝(たれ)は
彼女(かれ)が他に許せしことあるを知れば
何のさまたげぞ
彼女(かれ)の唇、汝(なれ)の唇にあひて冷たからんや
彼女(かれ)の肩、汝(たれ)の胸に抱かれて、なよやかを失はんや　（ブスタンより）

蒙古時代の他の大詩人として知られたのは、ハアフイズである。本名をシヤムス・ウ・ディン・マホメットと呼び、第十四世紀の初に同じくシラーズで生れた。青年時代は酒色に身を持ち崩したが、やがてスフイスムの信徒となり、叙情詩人として、イランの一流に數へられる。併し彼も亦イスラム教徒としては、あるまじく飲酒戒を犯し、却つて酒を讃美する詩を作つたから、今でも清教的の回教徒は彼を非難するが、イランではフイルドウシーやサアデイと共に、國民的詩人として崇められてゐる。所謂『頌歌集(ディヴアン)』が彼の大作である。

うるはしのシラーズ娘よ
もし汝(な)が手に我が心を捉へなば
我は汝(な)が頬の黒子の一つに代へて
ブハラの都をも汝(な)に與へむ
サマルカンドをも、また
殘んの酒を我に剩さず注げよ
天に昇るも、ムサッラの薔薇の道も
ルクナバードの浪うつくしき泉の園も
再びは見ることを得べしやは

これが當時喧傳されてゐたハフイズの詩の一節の大意である。
タメルランがイランを席卷して、フアルスを陷れ、首都シラーズに於て、ムサフアル朝の王、シヤー・マンスールを平げたとき、上記のハフイズの詩句を知つてゐたタメルランは、わざわざハフイズを呼びにやつた。此の英雄は詩人を責めて、

『地上の最大王國は皆我が劍の塵となつて、我が鄉國の二大都サマルカンドとボハラとの勢威を加へるやうになつた。汝ハフイズは何の據るところあつて、我が誇とする二大都を美人の黑子に代へむとするか』

と云つた。ハフイズは靜かに王に向つて、

『我この贅澤三昧の爲めにこそ、今日かくの如く貧しき樣にはなりけれ』

と答へたので、タメルランは大に悅んで彼を許し、厚遇したとの傳說が殘つてゐる。

以上述べたところを綜合すれば、イスラム以後のイラン文學は、イスラムの影響を受けてはゐるが、イラン人固有の藝術性審美性に基くところ多く、そのイスラム信仰も、神秘的夢幻的な表現を取つて、嚴格な正統派の戒律を逸脫するものが多いのである。併し文學としては、イラン民族の存してゐた爲めに、他のイスラム國民、卽ちアラビア族、トルコ族等は、一つの文學的の潮流に便乘して、幸にもイスラムが渦潤した敎義でなく、生きた人間の雅味のある文化として後世に多くの遺產を殘した譯である。

イスラム以後のトルコ文學

イスラム以前にもトルコ系の各種族は、ある程度の文化を持つて居り、文學として相當の作品も存在してゐたらしい。併しトルコ族が今日の小アジアに定着してからの文學は、イスラム以後に屬して居り、その初期はアラビア、イランの影響を著しく受けたものばかりである。トルコ人の間の文化語は主としてイラン語であり、十三世紀になつて漸く公用にもトルコ語を用ゐる法令が出た位である。

かくの如く獨立したトルコ語の詩文で後世に殘つた略最初のものは、十三世紀から十四世紀にかけて生きて居たユヌース・エムレのものである。彼は神秘的な詩を作り、ネオ・プラトン的な背景にイスラムを盛つたやうな思想であるが、後世に與へた影響は、彼が主として國語を以て書き、人々の耳に快い韻律を用ゐた爲めである。十四世紀以後になつても、その用語と韻律の模倣者が已まなかつたのである。而してアラビア、イランを崇拜してゐる民衆の間に、トルコ語の敎養を弘布する意味に於て、大なる功績があつた。

同時代で少し後れて出たシエイヒイといふ詩人も、當時のサルタン・メヒメッド一世及びムラード二世に寵せられたが、彼の詩は第十六世紀にまでも相當の影響を與へた。前述したイランの詩人ニザーミーのホスロフ・シリンの悲戀の歌を、トルコ語に譯したものは有名であるが、

此の飜譯は普通の譯文といふよりも、獨立の文藝作品として價値がある。後世彼を激賞してミヤイヒ・アル・シュアーラと云ひ、埃及にまでも尊崇されてゐる。

十四五世紀のトルコには、宮廷初め上層階級が文藝學術を振興した爲め、詩宗文人相次いで世に現はれた。ブルサのアハメッド・パシヤ、ネヂャティなどは詩人として今に讀まれてゐる。散文の大家にもシナン・パシヤとかサール・ケマルなど顯はれた。

十六世紀はオトマン帝國が歐亞を跨にかけて、世界の富强を誇る勢威を示した時代で、歷代の皇帝も悉く學藝を奬勵し、詩文の外、史學、地理學も起り、歐洲の學術にしてトルコに知られざるものなき情勢になつた。又此の時代には古典的文體の外に、大衆の言語を以てする詩文が勃興し、史的題材や傳統の外に、市井の生活を歌つたものが流行した。恰も我國の江戸文學の時代にはフズーリといふキュルド種の詩人が宮廷にも重んぜられ、最も世に顯はれて、その『ライラとマヂヌーン』の詩は、十九世紀の前半まで讀まれた。

第十七八世紀はもはやオトマン・トルコ族の衰運を示す政治情勢にも拘らず、文運はますます隆興し、イラン、アラビアの影響を離れた獨立のトルコ文學の色彩が、いよ〳〵濃厚になつた。

第十七世紀で特筆に値するのは音樂詩人（サーズ・シアイルレリ）の輩出で、大衆の中は素より軍隊や宗教團のうちにも盛に行はれた。民譚や傳說を題材にしたものは、今日でも此の時代のものが讀まれ歌はれてゐる。

第十八世紀の詩人としてはコッヂヤ・ラーキップ・パシアやシヤイク・ガーリップなど、又文章ではコッヂヤ・セグバーン・バッシュなど顯はれてゐる。

十九世紀になつてトルコは所謂『歐洲の病人』と稱せられ、國運の傾くと共に、學藝も衰へたが、後半に近づくに從つて、國內庶政の革新運動が起り、トルコ語で謂ふ『タンズイマット』時代に入つて、歐洲文化の攝取と共に、文學上にも新潮流が現はれ、文運復興の一時期を劃するに至つた。

此の時代の特色は學藝上の歐化運動であるが、文學の上では英佛の文藝作品の飜譯や飜案に始り、自由思想、祖國や民族の觀念、立憲主義等も行はれ、後にアブドル・ハミッド帝が專制主義で抑壓するまでは、文運は大に盛となつた。

此の時代の文學上の偉大な人物はシナーシ、ナミック・ケマル及びズイヤ・パシアなどであ

つた。又文化的にはアハメッド・ウエフイク・パシアやアハメッド・ミドハット・エフエンデイが最も功績があつた。

十九世紀の末葉には前記の專制時代に入り、青年文學者たちの一派は、『藝術のための藝術』をモットーとして「セルヴェテイ・フユヌーン」の雜誌を中心とする新運動を始めた。トウフイク・フイクレットが此の一派の巨頭であつたが、檢閲に壓迫されて後は發展しなかつた。

二十世紀に入つて、立憲革命が成功したが、政治は內外とも混亂を極め、隣邦との戰爭に惱まされた後、歐洲動亂にも捲き込まれ、ドイツと共に敗戰の憂目を見た。此の間の文學運動はケマル・パシア卽ち後のケマル・アタチュルクの國民的獨立の新興共和國になるまでは、ネオ・イスラミズムで、近代化された宗教文學運動から、漸く非宗教的國民運動に便乘したものになつた。『生活の爲めの藝術』から、祖國の爲めトルコ人の爲めの藝術たる文學になり、ローマ字の採用と共にいよいよアナトリア民衆の中に喰ひ入るものになつた。

此の時代の作家及詩人としてはハリデ・エデイプ夫人やレフイク・ハーリッド、ファリーフ・リフキイ、ナアジム・ヒクメット、ヤクプ・カドリ、レサッド・ヌリなどが世にあらはれてゐる。

現代のトルコ文學は、かくの如く故アタチュルクの指導の下に、新しき祖國再建に協力し、悉く一つのトルコ精神とも云ふべきもので動いてゐる。ローマ字の採用とペルシア・アラビア語源の用語排斥とが、更に此の精神を激成したのは云ふまでもない。

ダンテ神曲に及ぼせる
イスラム思想の影響

中世歐洲の所謂暗黒時代に、キリスト教の文化が光を東に仰いだことは、今日では明白になつてゐる。中世イスラムと云へば所謂東洋即ちアラビアの思想や哲學と、七百年間の占領の下に在つたイベリア半島のそれとを指すのであるが、これらが歐洲のキリスト教文化に何を與へたかについては、近來各種の研究が續出し、例へばアヴェルローエスの神學がトマス・ダキノに及ぼした影響、「イホウァンアス・サーファ」のアンセルモに及ぼした影響などはその著しいものとされてゐる。

これらの研究のうち、尤も世人の注目を惹いたものは、ダンテの神曲に於けるイスラム思想の影響である。イタリア、スペインなどのアラビア學者による此の研究は、前世紀以來、多くの業績を殘してゐるが、スペインでは夙にフリアン・リベーラ (Julian Ribera) 及びその高弟ミゲル・アシン (Miguel Asin y Palacios) などの研究が秀でてゐる。後者はカトリックの僧職

に在つて、マドリ大學のアラビック學の教授であるが、彼の研究は二十年ほど前から發表せられて、學界の驚異となつてゐる。

ダンテ神曲の哲學がネオ・プラトーン的の傾向に影響されてゐることは、若干のダンテ學者の高調したところであり、有名なブルーノ・ナルデイ (Bruno Nardi) の如きも夙に著想したところであるが、アシン教授に至つて尤も詳細にして明晰な研究に到達したのである。

彼がスペイン時代のコルドーヴァの囘教哲學者イブン・マサルラ (Ibn Masarra) のネオ・プラトン的神祕思想に關する研究のうちに、此の思想が、フランシスカン派や前トマス派の神學に攝取されてゐることを明かにし、同時にダンテの思想にも入つて居ると論じた。それは當時までダンテ思想の根柢は、アリストートルの哲學とトマスの神學であると信ぜられた通説に、正面から反對するものであつた。

アシン教授の論據には幾多の重點がある。併し中にもダンテ神曲中のダンテとベアトリーチエとの天國諸圈を經て昇天する思想が甚だしくイスラムの天國思想に似て居り、特に前記イブン・マサルラの弟子と覺しきイブン・アラビー (Ibn Arabi) と云ふムルシアのスフィー派の學者が、その著書フトウーハット (Futuhat) に描いた神祕的な昇天思想から影響を受けたことを

明かにした。

此の研究から出發してダンテ思想の典據たるものを探るうちに、アシン教授はイブン・アラビーの昇天描寫は、必ずしも獨創の神祕思想ではなく、イスラム神學のうちに久しく傳へられてゐる「ミラージ」(Miraj)の神祕的驟案とも云ふべきものたることを發見したのであつた。云ふまでもなく「ミラージ」は豫言者ムハマッドの昇天であり、彼がエルサレムから神の王座に到達する聖旅のことである。イスラム傳說に於ては、「ミラージ」に先だつて「イスラ」(Isra)即ち「夜の旅」がある。これは豫言者がさまざまの幽冥界の地域を通過する旅のことであり、正しくダンテ思想の淵源である。アシン教授はイスラム傳說とダンテ神曲とを組織的に比較研究して、冥域の構圖や建築、即ちその風土的觀念に於て軌を一にすることを證明したのであつた。

ここに一つ問題として殘るのは、神曲とイスラム傳說との相似が果して同一の淵源から出發してゐるのであらうかといふことである。即ちダンテがイスラムの天國構圖を採用したと考へるよりも、中世キリスト敎の傳說に基づいたものではないだらうか。或は考へやうによつては、イスラム傳說自身も何等かキリスト敎の傳說又は口碑に負ふところがあるのではあるまいか。

是は重大な疑問である。

アシン敎授はこの疑問に逢着して、更に研究を一步前進させた。彼の結論は神曲に於て空前の獨創と認められてゐる天國構圖には、之に先だつ類似のキリスト敎傳說はなく、やや似通つた傳說の多くは、却つてイスラムの死後生活についての傳說に由來してゐると主張して、ダンテ學者を驚かしたものである。

ダンテ學者の多くは詩聖ダンテを餘りに神聖視して、その神曲は全く獨自の天啓による創作であり、神學的にも歷史的にもイスラムの如き邪敎異端の傳說に影響されたものでないと考へてゐた。少くとも十八世紀の末葉頃までのダンテ研究者は、かくの如き態度を採つてゐた。恰も百年程前（一八二四年）に、イタリア僧のカンチェリエリ(Abbe Cancellieri)が十三世紀の修道僧アルベリックの地獄幻想なるもののラテン文を發表して、その構想がダンテ神曲の地獄篇に材料を與へたことを主張したときに、ダンテ學者は擧つて之を誹謗したくらゐである。この幻想なるものはアルベリックが幼年時代に病臥してゐた際、心頭に映じた死後の旅路を描いたものであるが、爾來學者はその描寫の多くが、中世の學術思想の背後に在つたイスラム文化と關係のあることを立證してゐる。例へば淫蕩に耽つたものは氷の中に埋められ、殺人犯は

煮え血の池に投げ込まれ、悪母は乳を鈎にかけて宙に吊り下げられ、姦通女は業火の上に吊られてゐる。これらはダンテにもイスラム傳説にもアルベリック幻想にも略共通であるが、特に著しいのは天國に渡る橋のいかにも狹いことである。十九世紀になつて、ダンテ學者は科學的客觀的の調査を受容れるやうになり、ダンコーナ（D'Ancona）オザナム（Ozanam）ラビット（Labitte）グラーフ（Graf）等の學者の研究は、從來の解説に數歩を進めてゐる。アシン教授の業績は更に百尺竿頭一歩を進め、ダンテ神曲とこれに先だつキリスト教傳説を比較し、更に時代としては先だつてゐる死後生活についてのイスラムの傳説との類似を突止め、その淵源の大方をイスラムに遡るものと結論してゐる。イスラムの死後生活についての傳説中、前記のムハマッドの夜間旅行及び昇天の傳説は、特に多くの影響を與へたものと思はれるが、更に中世初期以來のイスラム神祕思想のうちに審判の日についての默示的場面があり、天國や祝福幻想等の神學的觀念にも、ダンテの精神主義に著しい影響を與へたと思はれる理想主義も精神性も存在してゐるので、イスラムの文化を低位に置く淺見者派を除けば、此の説はダンテを冒瀆するものでも、神曲の價値を傷けるものでもないことは明白である。

○

アシン教授の研究を詳細に紹介するのは、この小文の盡すところでない。ここには一二の要點中、我國イスラム研究者の興味を感ずるものを擧げるに止める。「イスラ」思想は勿論「クラーン」第十七章第一節にある。

神は讃むべきかな、神その僕（ムハマッド）を召して、その聖殿（メッカ）より遙なる我が祝福を受けたる神殿（エルサレム）にその榮光不可思議を彼に示さんがために夜の旅に赴かしめ給ふ。

此の神祕思想は初代イスラム信者以來、數世紀に亙つて限りなき好奇心を喚起したもので、幾萬の傳説口碑がこれを繞つて作られ、今日有權的な「ハディス」即ちムハマッド自らその體驗を口授したと傳へられるものは、第九世紀に出來た六つの「ハディス」である。此の「イスラ」の夜の旅をダンテ神曲と比べると、多數の類似が見出される。先づ未知の案内役がムハマッドを深き眠から呼び醒まして、第一着に峻しい山を登らせる。それから煉獄、地獄、天國と相ついで經めぐるのも似てゐる。委曲については多少の差もあるが、六界の苦行があり、最後は異端の地獄であり、小兒の天國、信者、聖者、殉教者、豫言者の天國があり、最後に神の王座に導かれるところも共通である。尙各界の住者の功罪について案内役が一々説明すること、

行くにつれて曾て面識のあるものの靈に會ひ、これと語を交はさうとすることなども兩者に共通である。ダンテ神曲とイスラム傳說との相似は、特に天國描寫に於て著しい。「ミラージ」は主として三個の傳說に基くもので、八九世紀を時代とし、ブハーリ、イブン・アッバス・マイサラ又はオマールをその作者とする。此の三樣の傳說は詳細の點では多少の相違もあるが、煉獄や地獄の各界を通らずに、直接ダンテ神曲の第三編天國の描寫となる。その中に最も似てゐるものは、ダンテの昇天は淨化されたベアトリーチェに導かれて天空を通るのと、ムハマッドが同じ狀態で天使ガブリエルの手をささへながら昇天することである。兩者とも各種の天界を通るのであるが、その各天文的天空の記述では、博學なダンテの科學的知識は、五世紀の差のあるイスラムの神祕思想家よりもずつと的確である。その他の點ではムハマッドの七つの天も、ダンテがプトレマエウスの體系により名づけた七つ星もあまりにも類似してゐる。

ダンテ神曲に於ける最大の問題はダンテと愛人ベアトリーチェとの關係である。キリストの天國には男性女性の區別もない、戀も愛も形を變へ姿を淨めたものである。然るにダンテとベアトリーチェは淨化した人間とは云ひながら、現世愛慾の姿を示すもののやうである。イスラムの天國は、キリスト教の批判では肉感的天國と呼ばれる。此の點で、ダンテのベアトリーチェはイスラム神祕思想の影響を受けたものと觀るべき理由は充分にある。地上の天國即ちエデンの園の思想も、そこに於ける愛人の邂逅の描寫も、恐らくイスラムに負ふものであらう。その最高峰とも云ふべきダンテ・ベアトリーチェの邂逅は何と云つても、固有のキリスト神學思想、特に中世の禁慾主義と相容れないものである。素よりその基調は、ダンテの性格から來る騎士道精神・神祕主義と、愛慾を美化するロマン思想を多分に調和したもので、正しく歐洲ロマン思想に先だつアラビアの神祕思想が、イスラムの神學に全く類似の資料を與へたものであり、イスラムに存する純愛思想の發生は、正しく此點から觀察すべきものである。而してイスラムに於ける最後の場面、愛人が天國に入るとき、その精神愛の極致たる天の花嫁が、彼に向つて地上の愛に沈淪したことを責め、靈の勝利を語る描寫の如きは、そのままダンテの神曲に壓倒的な影響を及ぼしたものと斷定すべきである。

以上が大體アシン教授の所論の要點であるが、この地上天國の思想のうちにはイスラム自身が佛教思想の影響を受けた形跡があり、我々に幾多の研究資料を提供して、近代の學者に佛・耶・回の三大宗教の相關影響を檢討するの機會を與へて居るが、之には論及せず、單に、ダンテ神曲のイスラム神祕思想に負ふところ多きことを論ずるアシン教授の論旨の外郭を紹介するに

に止めたのである。

參考書目

Miguel Asin y Palacios, La Escatologia musulmana en la Divina Comedia, 1919.

E. B l o c h e t, Les Sources orientales de la Divine Comédie, 1901.

I b n A r a b i, Taljuman al'Ashwâq (Dakhair) 1312 Heg,

O z a n a m, Des Sources poétiques de la Divine Comédie, 1859.

無事浪語

文化宣傳の諸問題

人類の文字を使用した歴史は、僅に四千五百年に溯るだけであるが、その生活の痕跡は五十萬年のいにしへから殘つてゐる。文字以前の文化は恐らく意識的の宣傳を少しも試みなかつた文化であらう。

文化に今日の意義の宣傳が始つたのは、近世もずつと後に屬してゐる。宗教の一つの使命は下衆生を化するに在るから、おのづから宣傳を伴ひ、「プロパガンダ」といふ語がローマ法王廳から出たことも、人の知る通りだ。併し一國又は一民族が、政治的の目的でその文化を傳播するのは、古代には知られてゐない。文化の交換は古代の外交の主たる任務であり、征服者が被征服者に自らの文化を强制するのは當然すぎる戰勝の結末であつた。唯回教初代アラビアのイランに於ける、清朝の漢民族における、いづれも被征服者の優秀なる文化が戰勝民族に滲透して、結局は文化的に征服されたのは、宣傳に由らざる文化の弘布についての適例である。

近世の西歐文化が植民地の未開人に強要せられるのも、我々の目のあたり見てゐることである。併しこの場合でさへ、アメリカの先住インデアンやニグロの音樂舞踊は、アメリカを、つゞいて全世界を征服してしまつた。この音樂に內在する文化的價値はその特異性にあるのみであるが、西歐文化の百貨店のやうなアメリカでは、これだけが唯一のアメリカ固有の文化であつたのだ。

文化が宣傳の對象たる爲めには、その特異性と普遍性とを備へる必要があるのは、此の例でも明かであらう。

○

今日諸國で尊重してゐる過去の文化は、多くは封建制の特權階級が造り且維持した少數者の文化である。「エリット」の遺産である。併し二國の文化政策が、萬民をして「藝に遊ばしむ」るに存しない限りは、その國民の文化水準は高いものとは言へない。國民の教養が卽ち文化である。

古代文化とその國民の教養との關係は、さまざまの意義に於て現代に示唆を與へる。メソポタミアは人類文化の淵叢と云はれてゐる。スメリア、バビロン、アツシリア、ペルシア等、相ついでこのあたりに文化の華を咲かせてゐる。此の地方で驚異に値する遺跡は、王者が後代に自己の業績を傳へる爲め自ら錄して置いた記念碑である。例へばベヒストウンのダリウス大帝の彫岩は三國語を以て、大帝の事績を明記してゐる。此處を過ぎる旅客や行商が、少くとも此の文字を讀み得ることを豫想してゐるのだ。實際上讀み得た證據には、庶民が日用に使つた石の封印が、同じ時代の文字を彫つてあり、その出土數は數百萬にも上るので明白である。またササン王朝滅亡後のイランでも、十三世紀の蒙古侵入までは、詩歌や史傳や學藝の文叢が夥しく存在して今に殘つてゐるのは、庶民が讀盡し得たことを示す。卽ち文字のある人民の多いことは、中世までのイラン文化が國民の教養と並行してゐた適證である。

ギリシア、ローマの文明が文字として西歐國民に君臨したのは千二百年程の間である。これは奴隷以外は萬民が文字の讀めた時代である。ローマ時代のイギリスでさへ、今日でも往々發見される職人の瓦などに戲書した文句によつて、下層階級にも文字の行き渉つたことを示してゐる。ローマ文化の顚落と共に、歐洲の下層民は十九世紀まで全く無學になつてしまつた。恐らく我國の德川時代の庶民の方が、ずつと教養の高いものであつたらう。武力に統制された大名政治の時代に、これだけの文化的普及が實現されたのは、日本人のうちに內在する一種の精

神的要素と、三百年の平和との御蔭である。

○

文化と武力との對立を示す史上の例としては、誰れでもすぐアテネとスパルタ、イランとアラビアやトルコ、支那と日本、ドイツとフランスなどを擧げる。併しあらゆる國家の興隆には必ず國民の文化的精神的要素を必要とし、世界の半ばを馬蹄に蹂躙し去つた成吉斯汗でさへ、敵地を屠つても工人だけを尊重したり、その大軍の中には工兵隊に劣らざるものが相當に編制されてゐたことなどを考へると、多少の文化的要素を備へてゐたに相違ない。

ギリシアの古へは、アテネが文化を代表し、スパルタが軍國を表象したやうに傳へられてゐるが、近代の研究は、スパルタが必ずしもいつでも非藝術的、清教徒的で、質實剛健の精神を代表したものでないことを證明して呉れた。卽ちスパルタも溯つて紀元前第七世紀から六世紀の初葉になると、ギリシアで最も藝術を愛しやややもすれば華美に流れた國民であつた。此の時代の遺物の出土したものには、東洋的とも言はれる程度の音樂や裝飾の愛著を示すものがあり、詩歌管絃の文化が人民に普及してゐたことの痕跡が頻々と現はれてゐる。何處にも健實や質素や恬淡の風が見えない。それはずつと降つてスパルタに清教的革命が起つた後のことである。

或る意味では、これだけの文化的精神的要素があつたればこそ、スパルタ人は後世に剛健なる武士道を建設する基礎的條件を備へてゐたとも言へる。元祿時代の豪華を生み出せる日本人であればこそ、明治の近世的軍備に由つて東洋第一の武力的偉業をも遂げたのである。

廣い意味の文化は、林語堂の言ふ如く有閑の所産でもあらう。併し今日問題となつてゐる東洋文化は閑人の風流ではなく、民族の精神力の結晶である。林氏はアメリカの高壓高速の文化に對して、支那の風流卽ち有閑階級の文明を賞揚するの急なるあまり、東洋文化の一切を風流韻事と說き去つてゐるが、今日我々が東洋文化として世界に說きたいものは、それだけではない。これだけの精神的成果を誇り得る民族の文化水準が問題なのである。

○

對外宣傳は現代に在つては、いつでも主として政治的の動機を持つ。特に戰時とか國際的の危機に在つては、必ず敵國又は相手國の缺點を指摘して、憎惡の種を蒔くのが目的である。世界大戰のとき、英國の對米宣傳は巧妙を極め、英國の宣傳員は口を開けば必ずドイツを賞めそやして、却て反對效果を擧げ得た。併し結局はドイツの恐るべく憎むべきことを宣揚したのである。

文化宣傳に於ては敵國がない、その目的は憎惡でなく愛好である。歪められたる情報ではなく、正しく眞實なる認識である。

一國の文化を海外に宣傳する必要と價値とは、嫌はしい問題である。古代の文化はその國民の自ら宣傳した爲めよりも、他國民の關心と興味との爲めに、自ら弘布せられたものである。此の點からは、我が文化に憧るるものは、來つてこれを學べといふのが正しい態度であらう。唯今日の世界の體制と國際的對立の上からは、自國の認識を世界に植ゑ弘めない國民は、必ず不利益な立場に陷る。外交機關に文化アタシェなどの問題が起るのは、主として此の爲めである。

滿洲事變前後から何人も感じたことは、支那の文化が日本文化よりも、歐米に於て遙かに知られてゐることである。歐米の美術館や私人のコレクションでも、支那の藝術品は相當に高級なものが多數に蒐められてゐるに反し、日本藝術の代表品は概ね貧弱である。之は勿論支那人が意識して文化宣傳を行つたのではなく、支那人が自ら國寶をも金錢に換へて海外へ齎渡した結果であり、多くの場合には賣物をすら齎るから、買手は之を平然と陳列してゐるので、其の起源から云へば決して支那の名譽ではない。我國は早く國外に自國文化の逸品を出さなくなり、これはむしろその國民的統制と正直とを語るものであるが、文化宣傳の意味からは、非常に損をしてゐる。尤も支那は四千年の歷史と世界有數の大領土を持ち、限りなき諸民族の文化を攝取した當然の結果として、所謂支那學の發達を見た。爲めに西歐の一婦人にしても、必ずしも支那の精神を愛さずとも、支那の文物に魅惑を感じ、謂ふところの「シノアズリー」にさへ愛著を感ずるのである。

加ふるに日本の官憲は、極く最近までは、所謂文化宣傳に甚だしく冷かであつた。二三の實例を擧げて見よう。

今から約三十年前、現在佛大使の杉村君は、若き外交官補としてパリに行つた。セーヌ河の競泳に、彼は日本の水泳選手として見事に覇を制し、日本の爲めに氣を吐いた。然るに當時の外相加藤高明氏は彼を叱責して曰く、貴官の佛國に在るは外交官たるが爲めなり、斷じてスポーツなどに浮身を窶す勿れと。

今では前畑孃、牧野、天野の名が、五年や十年で忘れられる大公使よりは、遙に日本の爲めになつてゐる。雪洲や藤田畫伯についても同じことが言へる。

ピエル・ロティは東洋の素材を描いて不朽の文名を垂れた。彼の認識は誤つてゐたらう、併し彼の作品を讀んで、トルコや日本に愛著を感じないものはない。蝶々夫人は明治初年の日本

婦人の婦徳と貞操觀を萬世に傳へたのである。此の意味でロティは日本の恩人とも云へる。先年南佛に焉棲して老を養つてゐたロティが靜かに世を辭したとき、國民葬にも近い盛大な會合が、期せずしてスペイン境のアンディに行はれ、文人も政客も萬を以て集つた。トルコの大使は自國民の文化を世界に知らしめた恩人として追悼の演說をした。イランもギリシアも、皆なにがしかの緣故を述べて、ロティの靈に敬意を表し、同時に自國の文化的存在を認めさせた。

獨りロティの文名の出發點にもなつたほどの日本帝國は、大使はおろか、書記官一人だにも列席せず、代つて發言をするものすら列ならなかつた。西歐の文化人は、日本の如何にも文化的往來に無關心であるのを、驚き或は憤つたのである。

五年ほど前ロンドンに日本美術展覽會を催す議があつた。さまざまの障害の爲めに日本では否決した。これらの障害は公平に見ていくらも避ける方法があり、財政的の困難も、もう一奮發で解決出來たのである。その前年のベルシアと支那との展覽會は、相次で人の眼を奪ふものがあつたので、志あるものは、日本のそれに多大の期待を懸けてゐたのであつた。併し今日まで茶の湯、生花、劍舞、詩吟などが、生きた現代の文化として、アメリカなどを流して歩くだけで、多少の小規模の藝術交換展以外には、何事も企てられないのである。菊五郎も文樂も能樂も未だ海を渡らない。勿論筆者は此種の藝術が、少數の理解者を目的に、主として日本側の發意と負擔とに於て海外へ紹介せられるのを贊成するものではない。萬葉集の英譯などもまことに不急な贅澤事と考へてゐる。これは現代一流の名譯者の手に成つてゐるに拘らず、萬葉の持つまことの味を傳へることは全く不可能であり、意味だけ示すなら、あれほどの力瘤を入れる必要はない。率直に言へば、全く國際的の文化紹介の眞義に通じない人の企と思ふ。疑ふものはボノー博士の俳句の佛譯を見れば、此の點は明白になるだらう。

外務省では從來のキモノ、ヨシハラ的文化紹介、乃至は歌舞伎、茶の湯、ハコセコ、琵琶の中世日本文化の紹介でなく、航空機、化學工業、寫眞電送の近代文化を紹介するといふ。これは何人も双手を擧げて贊成するが、これもあまり極端に行くと困つた結果になる。日本人をマレー人のやうな半開國民と誤解してゐる、無識な外國人を敎へるには足りやうが……。

日本の近代文化は嚴格に言へば跛行文化であり、空輸が盛んになり、夏の果實が冬でも自由に食べられるかと思へば、大都會にすら全部の水洗下水道は出來てゐない。世界一の軍艦と世界一の汚い便所とが兩立してゐる。加ふるに日本の輸入近代文化は、未だにまことに見苦しいものが多い。この意味の文化水準からは、イタリアには勿論及ばず、チェクにも劣るといふの

が、公平な結論ではないかと思ふ。

東洋文化の偉大さはやはり物質や機械にはなく、精神の所産、心域の行事である。日本人が下駄文明に戻つても、世界に誇り得る陶器や漆器があり、世界一般の持たないすぐれた審美眼を持ち、外國人の考へ及ばない高い趣味と深い情操を持つてゐることにある。これと同時に近代の機械文明をも思ふ存分攝取して、これに於ても敢て外國に劣らない素質を持つところに日本人の偉大さがある。書道畫道の傳統の益々向上して行く日本に、タイプライターもテレヴィジョンも進歩發達してゐることを、同時に理解させるのが、現代日本を知らせる要點ではないかと思ふ。

○

對外の文化宣傳ではフランスが最も有效な組織と陣容とを備へてゐる。フレデリック大王がヴォルテールに師事し、王宮の用語はフランス語であつたことなど誰でも知つてゐる。東歐や近東にフランス文化の滲透してゐることは何人も驚くばかりだ。ルイ十四世とナポレオンとのお蔭でもあるが、政治的にはフランスの勢力が著しく凋落してからでも、トルコのイスタンブールでもエヂプトのカイロでも、街の名は全部佛語で出てゐた。今では完全な獨立國のエヂプトが大戰後イギリスの保護國となつてからでさへ、エヂプト人のインテリで英語の解るものは佛語十人に對し一人位の割合に過ぎない。國務大臣すら半數以上は英語を解しない有樣である。トルコではこれよりもつと甚だしいフランス文化優勢である。東歐やバルカンは言ふまでもない。

ドイツやイタリアもフランスに次いで文化宣傳に熱心である。比較的冷淡なイギリスも、近頃は相當に努力をして、英語を近東中亞等で、佛語の勢力に代らせようと試みてゐる。併し英國の息のかかつてゐるパレスチンやエヂプトでさへ、今尙佛語の勢力は優勢を誇つてゐる。息のかからぬイランでは、英語の新聞はないが、佛語の日刊は出てゐる。

イタリアは南米と近東とに全力を注いでゐる。同じラテン語系のポルトガル大學などでも、イタリア講座が設けられ、その優等生には奬學金や賞金などを與へて、百方これを奬勵してゐる。ボルトガルに於ける親伊傾向は、必ずしも首相サラザール博士の全體國家主義で、獨伊と共鳴してゐるだけの爲めではない。敎育ある青年のうちにイタリア文化の理解者愛好者が多い爲めである。

○

日本の對外文化工作には相手方の心理狀態を無視する獨善主義が多い。先方の悦びさうなこと

とばかりを高調する媚態も斷じていけないが、自分だけ解つてゐる洒落を、向ふも解るものと考へる弊は、日本の對外工作に通有である。近頃日本精神の解説が對外工作の一つとして重視されてゐるが、遺憾ながらその眞義が、歐米人に通ずる程のものは甚だ稀である。此の點では岡倉天心、新渡戸博士などの再來を念じたくなる。

官僚は古來獨善を批難されるが、本職の外務省は姑らく別とし、近年あらゆる機關が少しづつ對外文化工作を分擔して、多少の功績を擧げてゐるが、中には甚だしくポイントを外して、有害無益な仕事に國費を濫用してゐるのもある。海外生活の長い體驗や、相手國民の心理についての深い知識を持つてゐる文化人を動員して、その教養を利用しないのは、惜しみても餘りあることだ。國民精神總動員と云ひながら、時局下の對外文化工作には少しも國民中の「頭」を動員してゐない。

官界で此の方面の工作に成績を擧げてゐるのは、古いだけに國際觀光局が筆頭であらう。その刊行物や映畫も日を累ねて善くなつてゐる。日本の教育、庭園、柔道、生花などを說明した英文の單行本などは、便利な形で出來て居り、何處でも愛讀されるべきものだが、惜しむらくは多くは素材の配列が乾燥無味であり、文章がこれに伴なふ程度の味の無い英文なので、二三頁で止めたといふ英米人が筆者の知人にも五六人居る。改訂版には——例へば教育編——官僚の書いた原文に據らず、讀み易き編輯法に由り文章も歐米人の心理に通ずる書き方を採用して欲しい。

この例を述べたのは、官僚日本が外國へ出す宣傳的の刊行物に共通の缺點を指摘したい爲めである。勿論民間の企に成るものでは、もつと甚だしいもののあるのは言ふまでもない。

もう一つ我々の缺點は、現代日本の文化についての關心も認識も持たないことである。外國に在つては外交官は勿論、三井や三菱、正金その他の經濟機關の代表者も、一人一人が文化大使の使命を果すべきである。然るに此等の文化人は、多くは法律經濟の出身で、時としては自國の歷史をも文藝をも知らない人達が多いのである。況や到底自國の文化を外國語を以て傾聽せしめるだけの教養はない。今日の我國の新人にも遺憾ながら胡適も林語堂も見出せないのである。もつとも今の日本の外交官に、胡や林のやうな文化人が居たならば、恐らく二等書記官位で罷めさせられたであらう。

ファウストの英譯で名を殘したテイラーは在獨公使であつた。日本に大使として來て居たエリオットやゾルフ博士の東洋學者であつたのは誰でも知つてゐる。クローデルもジラルドーも

ポール・モーランも皆外交官であつた。日本の官僚では世界を相手にして後世に殘るほどの著書を出したものすら、先づ見當らない。

日本文化の對外宣傳の爲めには、日本人自身の中に自國の文化に對する理解と認識とを持たせるのが急務である。

○

日本の文化宣傳は、所謂西洋向きを主としてゐる。私は十數年前から、日本が東洋民族相互の認識を深める工作の必要を痛感して、機會毎にこれを提唱してゐるが、反響は頗る薄い。近年は少くとも三億にも上るイスラム民族との文化交換の實行を志して、先覺者の協力に依り多少の成績を擧げてゐるが、我國の朝野は未だ眞劍に此の努力を買つて呉れない。文化關係に於ては、いつでも歐米を主にして、東洋民族の指導者を以て自任しながら、彼等には文化的には殆ど何等の工作をも試みないのである。マレー、アラビア、トルコ、イラン等の言語を以て、日本文化を紹介する企は、昨年來イスラム文化協會が率先して實現し、顯著な成績を擧げてゐるが、從來は何の施すところもなかつた。

文化宣傳に關する限りは、東洋西洋に對する重心を逆にすべきものと私は考へてゐる。且イスラム民族などに對し、文化交換以外の接近は、今日に於ては百害あつて一利なきものである。相互の文化的認識以外に輕々しい政治工作は斷じて爲すべき時期でない。大和民族の將來を支配する、東洋民族糾合を目的とする邦家百年の大計は、文化的工作から出發する以外、斷じて成功するものではない。

日本の映畫は、世界の水準からは、まだ公平に見て及第點をつけるわけにはいかない。併し及第の見込は充分にある。此の點でも先づ東洋民族に見せる爲めに、東洋語の說明やドウブラージュを試みるべきで、いつまでも英佛獨などを主とすべきではないと思ふ。

輸出の困難は今日まで內容の劣つた爲でもあるが、外國では配給の機構が異つて居り、契約保障の方法に特異な點のある爲めでもあらう。大衆に日本文化を宣傳するに映畫ほどの有效なものはないのであるから、日本の文化人を動員してブレイン・トラストを組織してまでも、强力な國際映畫機關を設けるべきであらう。從來のは、ややもすれば若い官僚の、國費を以てするお道樂に過ぎなかつた。

先頃唯一人のリースといふ米人が、從來の我國の文化映畫をカットして自ら編輯したものを米國の大學や美術館で見せたので、觀衆はその優秀なのに驚いたといふ。これは、日本映畫人

の頭の不足と怠慢とを語つてゐる。

實際日本ほど特異な自然の背景があり、世界に冠絶する優雅な風俗があり、文化は中世も近代も調和を見せて居り、文藝、美術、古典、何一つ世界の驚異たらざるはないのに、これを素材とする映畫が世界に進出しないのは、全く不可思議に堪へない。日本語のまま見せて、說明文さへ立派な外國語で書いてあれば、世界が爭つて見るべきものである。編輯に意を用ゐ、伴奏の音樂の低級なのを改め、今少しテンポを考へて、「くどさ」を去るなら、今日、日本人の悅んで見るものの大半は、何國人でも悅んで見るであらう。撮影技術も仕上の杜撰なのも、世界市場の開けると共に、急速に改善されるであらう。

アメリカ映畫が、多くの場合に愚劣なストーリーでありながら、近年まで否現在でさへも世界を風靡してゐるのは、全く見るものに退屈をさせない爲めである。沙翁や近松が曠古の劇作家でも、その作品の盛り方に由つては、映畫としては甚だしく退屈なものになる。

何が人を退屈させるかの問題を、日本の映畫人は最大の題目として考へるべきだ。これが當分の間の彼等の心理研究の全部であり得ると思ふ。

私のラディオ觀

ラディオが日本のやうに、獨占的半公共企業であるのは、國策の手段たる一大機構たり、民衆の敎養指導の重大任務を負ふ點から見て、甚だ望ましい制度と思ふ。

しかし飜つてわが國現在の放送局が、この重大な使命を果してゐるかと云ふと、まだ前途遼遠と考へられる。

放送局の幹部の構成については、私は屢々疑を持ち、若干の機會に世論に問うたのであるが、識者のうちには私の疑に共鳴するものが非常に多い。

第一に放送企業を無電技術の故を以て遞信省の監督に屬させるのは、甚だしい不合理である。ラディオで放送される事項についての監督は、事柄の內容から言へば、內務省と文部省とに屬すべきもので、ニュースならば直接內閣情報局の指圖を仰ぎ、海外放送などならば外務省も擔任すべきであらう。無電の技術は形式であつて內容ではない。遞信省は若干の言分を持つだけ

で滿足すべきであらう。

從つて放送局の幹部や要職が、百歩を讓つて、いづれかの省の役人の古手で充たさなければならないとすれば、内務文部外務等の、何等か放送事項に知識と經驗のある人達を擇ぶべきだ。遞信省は技術者の若干を送るだけで充分ではないかと思ふ。

勿論こんな重大な事業が、官界の姥捨山になるのは國家の大患である。

○

私の意見を實證する二三の事柄を擧げてみよう。

非常時局で我國の立場を海外に宣揚する必要の缺くべからざるは何人も知つてゐる。而して海外放送の重要性が特に强調されてゐるのも論を俟たない。一概に支那人が宣傳上手で、日本人は下手と定めてしまふやうであるが、必ずしも虚僞の宣傳がいつまでも勝利を占めるものではない。

ラディオの對外ニュースなどの不成績は技術ではない。放送局の上層にその重要性の認識を缺くのが主因だと思ふ。私の海外友人から受取る多くの手紙には、ラディオによる對外工作から見たら、日本の宣傳戰は、今日までは全くの敗北だと言はないものはない。多數の有能な人達が働いて居ながら、ニュースの海外放送にすら滿足な結果を得られないのは、全く此の方面に經驗も認識も持たない上局の居るためと斷言せざるを得ない。「人がない」などと時々聞くのであるが、第三流か第四流の外國音樂家などに、一夜千金を吝まないほどの放送局が、外國語のアナウンサーに何程拂つてゐるか、想半ばに過ぎるものがある。

電化英語の明後日

ホリウッドが映畫の制覇權を握つてから、アメリカ英語が世界を風靡したのは、文化史上の異變である。帝王英語（キングス・イングリッシュ）などとお高くとまつてゐた英本國での、今日の最大關心事は、國語の純正を維持するのに如何すべきかであり、なかにもアクセントの防護工作にある。戰爭でアメリカの援助を求める以上に、また獨機の襲來に防空壕を備へる以上に、一所懸命である。

イギリスのBBC（放送局）のアナウンサーの發音については、一語毎に異議が出て甲論乙駁が行はれる。それにもましてアメリカ語の脅威から如何にして英語を救ふべきかの問題が、もつと焦眉の急を告げてゐる。

いづれの國でもスターの眞似は女學生からで、英國の若い娘たちの此頃の會話を聞くと、Ya, O.K., fine, swell, quite a cinch, Jane などの連發で、祖母たちを面喰はせる。なかには鼻にかかつたアメリカン・アクセントをそつくり採用してゐるのもある。これは極東や地中海に於

ける英國勢力の凋落よりももつと重大な事件で、如何なる方策もこれを防ぐ術がないのである。

英國の叔父さんたちの殊に憤慨してゐるのは、ホリウッドに働いてゐる英國生れのスターたちまでが、米人と共演する爲めに、アメリカの眞似てゐることだ。尤も映畫に出てくるアメリカ英語のアクセントと云つても、イタリア訛やユダヤ流、所謂イッディシュまであるので、千差萬別である。

三四年前に出た「ヴィクトリア大帝」といふ英國製映畫で、女王に扮するアンナ・ニーグルといふ女優は、ロンドンの銀座語ともいふべきアクセントを使ふ。所謂メイフェアのホステスの社交語を語る。これは全く史實を無視した冒瀆演出で、ヴィクトリア帝がひどいドイツ訛で英語を話されたのは誰でも知つてゐる。

イギリス語がだんだんアメリカ語に近くなつて行くのは、シネマとラディオのお蔭と云はれる。併しアメリカの方はあまりイギリスに近づいて來ない。ことにアメリカの學生のスラングと來ては、全く別の新國語が發生したやうなものだ。ニュー・メキシコ大學の機關新聞に出てゐる學生の會話の一節に、

He's a goon, if you want to be in the swish, and he wears too much hardware. I

digged with him at a jam session, but there was too much pitching woo there……

とある。註譯を加へると、

Goon—a silly bore.

In the swish—to be in the know.

Hardware—Jewellery that students wear.

To dig—to get acquainted.

Jam session—a noisy party.

Pitching woo—flirting, petting, necking &c.

電化英語が英語をアメリカ化することは、英本國のみならず世界共通で、日本もその最大の被害者の一であらう。此頃の日本娘で電髪（パーマネント）をやらないものはあつても、OKと叫ばないものはない。むかしから日本放送局の公用英語の放送は、アメリカ生れの二世のアナウンサーで、一二の例外を除けば、アメリカ人よりも一層アメリカ的不良英語である。曾て觀光局で作つた記錄映畫の說明も、大分低級發音の米人であつた。

合衆國やカナダへ向ける英語できへ、アメリカ式でない方がいいと思はれるが、歐洲や印度エヂプトなどに向けるものをアメリカ英語で放送するのは、明かに日本を輕蔑させる材料になつてゐる。私が此地方で聽いた體驗では正しくこの通りであるが、現に今でも此地方に居る友人から受取る手紙には必ずこのことが書いてある。

ホリウッドが電化英語を克服した今日でも、英語とフット・ボールだけはイギリス流を最上としてゐる。純正の劇壇ではアメリカでさへイギリス・アクセントを口跡の標準にしてゐるので明かだ。イギリスからの講演者がアメリカで受けてゐるのは、その英語のきれいな言ひ廻しと發音とに負ふところの多いのは、米人自身が認めてゐる。

英國が萬一今日のホリウッド位の小國になつても、英語の地位は世界的であらう。ローマが亡びても、ラテン語は生きてゐる。言語は動くから、スマートなスラングやアクセントの混淆が入つて來るだらうが、英語の基調はやはりイギリスであらう。オクスフォード・アクセントと氣取らずとも、帝王英語の純正は得られる筈である。

ドイツから對英放送をしてゐる所謂「ホーホー卿」の英語が、きれのよいイギリス・アクセントのまま電波に乘つて來る。イギリスからのドイツ語放送は概して發音が惡い。

空中宣傳戰では英獨の勝負は既に明かだと、傲岸なる英人自身が認めてゐる。

日本語の世界性

日本が新興東亞の指導者たるには、少くとも東亞の民族をして日本語を學ばしめなければならぬ、と云ふのが先頃の議會で、鶴見祐輔君の文相に對する質問の中に出てゐた。日本を理解し、日本を知り、これを愛するには、さまざまの方法があらう。日本文化を認識することもその一つであり、その爲めには日本語を知ることが有力な方法であらう。

日本語が世界に傳播するには、日本人自らが先づ日本語を知り、日本語の世界性を高める努力を試みなければならぬ。不幸にして今日の日本の指導者は、日本語を躍進日本人の國語としてその認識を正しうするだけの努力も工作も試みて居ない。

世界の國語のうちで、現に文化的に世界性を持つてゐるのは、フランス語に及ぶものはない。ヴェルサイユ條約で、ロイド・ジョージとウヰルソンが居た爲めに、漸く英語が歷史上初めて國際條約でフランス語と對等な地位を與へられ、條約正文の用語になつた。

今日の國際情勢に於て、フランスは遙にイギリスの下風に立つてゐることは、何人も拒まぬところであらう。併し一たび東歐から、アフリカ、近東、中東、卽ちエヂプト、イラーク、シリア、トルコ、イラン、アフガニスタンなどと旅するものに、最大の驚きを與へるものは、フランス語の勢力である。今ではこれらの國の青年は多くは外國語として英語を學ばされてゐる。併し三百年に亙るフランス文化の浸透は、一朝一夕に吹き消す譯にいかない。今でも知識階級の大部分は、外國語と云へばフランス語を語り讀み書くのである。

エヂプトの如き、大戰後英國の保護國であり、最近に獨立國となつたが、しかも英國の息のかかつてゐるのは周知の事實である。此のエヂプトの內閣諸公のうち英語を解するものは十人に二人ぐらゐである。私は歷代三人の首相と語つたが、皆フランス語を話し一人も英語を解する人は居なかつた。

イラークに於ても、イランに於ても同樣な目に會つたのである。勿論ルイ十四世からナポレオンに至る、フランス文化の世界征服が、尙その餘威を示してゐるものではある。唯他方フランス語が世界語として必要な條件を備へてゐる外に、フランス人が自國語のために一方ならぬ努力をしてゐることを知らなければならぬ。

フランス人ぐらゐフランス語に熱心なものはない。第一アカデミーは人も知る最高の學藝院であるが、學界文藝界の耆宿を集めて國語辭典の編纂を三十年がかりでやつてゐる。「シック」といふ字を本格なフランス語に入れていいかといふ議論が數ケ月に亙つて鬪はされた。日本の「パパ」「ママ」などの比ではない。

コンセルヴァトアルは音樂學校であるが、ここの入學のうち一番むづかしいのはディクシヨン即ちフランス語のよみ方の試驗である。最高の秀才がこれを卒業して俳優になる。聲樂や器樂にそれほどの天才が出なくとも、フランス語の名人は必ずここから出る。

國語の正しい發音、科白の完全な言ひまはしが文化人の最大の資格である。家庭でも、ある語について發音の爭が起れば、例へて見ると、歌舞伎へ行つて六代目の發音を聞いて、その正邪を定める。從つて政治家も第一流となるには、口跡の正しい一流俳優に國語の發音を習ふことがおきまりである。大戰當時の首相ヴィウィアニは名優リュシアン・ギトリ（今のサシア・ギトリの父）に、ブリアンは名女優ベルト・セルニーについて學んだ。此の二大政治家の演說ぶりは、口跡に關する限りは、師匠そつくりである。

日本では歌舞伎その他の傳統的存在は別として、俳優自身が不正確な日本語を語る。曾てフアゥストが初めて邦語で上場されたときに、『ワタスは不幸ネスて法律（ホウレチ）學まで學んだ』と發音した、東北出身のフアゥストが居た。

日本の大臣にはあらゆる訛の展覽會を開かせられて、國民は安心してゐる。訛がわるいのではない。御國ぶりは大に尙ぶべきである。が、日本語を世界に弘布する爲め、日本人が外國語を學ぶだけの熱心を以て自國語を勉强すれば、大政治家は自然に正確な日本語で演說するやうになると思ふ。これらの政治家は、時々義太夫や小謠を學んで、音痴ながらにある程度の修業をしてゐる實例を私達は知つてゐる。

近頃の日本語をくづして、生成する次代の日本語を惡化させ、延いてその世界性を失はしめる最大の責任者は恐らく放送局であらう。

放送局が概して、國語にも學藝にも敎化にも、あまり關心を持たない通信官吏の養老院のやうになつてゐることを私は度々警告したが、歷代の當局者は曾て耳を傾けたことがない。從つて日本語だけから言つても、放送日本語があのまま繼續される限りは、國語の向上は望まれない。フランスなど、辭典にさへ最高の頭腦を集めやのであるから、放送日本語は全國の最高權

威者の批判を經て、その純正を維持し躍進を圖るべきでないか。

放送用語の不純不整頓は、少し心あるものならば氣がつく。最も寒心に堪へないのは、此の放送局日本語が日本中のアナウンサーに模倣されてゐることである。試みにデパート、劇場、ホテル、レストラン、停車場などで擴聲器にかかつて來るアナウンサーの日本語を聞くと、誰しも悲しくなる。これが女子である場合は、殆どすべてラヂオ・ドラマの廉價版女優の口調である。我々はあのイントネーションを聞くと、何語か怪しまざるを得ないこととすらある。

專門家に從へば、純正日本音樂の放送に當つても、放送當局は日本語のディクションに甚だ不熟心である結果、歌澤とか小唄などの演奏家の選擇が著しく杜撰であると言はれる。從つてこれらの人の歌ひ方は、かなり日本語のアクセントを無視したり、屢々所謂「モリコミ」の不正確によつて歌詞と歌曲との階調が破られ、聽者の耳に誤つた日本語を強ひることになる。現代語の歌詞についても、ドラマなどと同じく、時には聞くに堪へぬ日本語のディクションを、臆面もなく電波にのせてゐる。

國語を輕んずる第二の大責任者は言ふまでもなく文部省である。

皇道精神や日本主義が提唱される時代に純正な日本語を國民に教へる學校は何處にあるか。日本語のディクションを誰について學ぶべきか。二三の俳優學校が限られた科白を職業の爲めに教へる以外に、音樂學校でさへ國語のディクションを教へて居ない。專門の學者が日本語にある發音學や音學の上の價値等差などを研究する以外に、正しい日本語の正しい發音を教へるものは、何れの學校にも存在しない。

發音だけではない。正しい語格の會話を指導するものもない。外國人に日本語を教へる貧弱な講習所の外に、國民は初等教育で字のよみ方と綴方を習ふ以外には、生きた現代の日本語を教へる學校は一つもない。「パパ」「ママ」の問題が出て大騷ぎをするが、國語が自然の生成物で人造のものでない限り、先覺者は自然を匡めずに正しい方向へ導くべきで、「パパ」「ママ」などを咎める前に、まだまだ澤山の仕事があるべきである。「キミ」「ボク」も同樣である。或は日本語の世界性を强化する爲めに、「キミ」「ボク」式に進化するのが、東亞の覇者たる躍進國民にふさはしいのではないか。又女の子が「キミ」「ボク」を使つたり、ターキー・ファンになる心理狀態を掘り下げて科學的に研究すべきであり、言語の末に拘泥して、頭から拒否するのは却つて有害であらう。

日本語の世界性

國民が現代國語に於て正しい教養を持つてゐない無數の例のうちに、誰でも氣の付くのは敬語の用法である。日本の敬語はアラビヤ語ペルシア語に比べたち、さほど複雜でもなく、イギリスの現行貴族制度の稱號による宛名の遣ひ別などに比べたち、さほど困難なものでもない。併し世界性から言へば、多少は簡易化が必要であり、少くとも「お肉のおたれのお加減」などは感心しない。

それよりも重大な問題は國民の儀禮や教養にも關係する場合である。子供が目上の他人に對して『お父樣はお役所にお出掛けになりました』と言つたり、女中が電話で同じく『御主人樣はただいま御入浴で御座います』などと答へる無意識の無禮を、今日では矯正するほどのビュリストは居ないのであらうか。外國語の例で言へば、目上に向つて Ken とか Vous とかは言はない。必ず三人稱であり、フランスなどでは、山出しの女中でも、雇主に對しては、直譯すれば『ムッシュ（御主人）は彼れの外套を召しますか』と聞くので、『あなたはあなたの……』とは言はない。人民戰線のフランスでさへ、これを間違へたらお拂箱である。英國でも三人稱の呼び方のある限り Your lordship, Her ladyship などと一々使ひわけをする。

これを要するに、現代國民が近頃聞く日本語のやうに亂脈な語格で、不正確な發音を續けて行く限りは、日本語の世界性は期待すべくもない。外國人が日本語を習つたら、日本人は人によつて全部違つたことを教へると言ふだらう。

日本の指導者が眞に東亞の新體制に應じて、日本語を世界——少くとも東亞に普及させる熱意があるのなら、先づ日本國民に眞の正しい日本語を教へる方法を講ずべきである。少くとも放送局と音樂學校の拔本的改革から手を著けるのが急務中の急務である。然らずんば日本は永久に「言靈の幸はふ」國になれないものと斷定せざるを得ない。

東京の文化を嘆く

○

現代の東京人が何であるかはむづかしい問題だ。少くとも「江戸ッ兒」の子孫ではない。雜然たる人種である。

ニューヨーク人の中には、アイルランドの首都ダブリンよりもアイリッシュが多く、パレスチンよりもユダヤ人が多く、恐らくナポリよりもイタリア人が多いやうに、大都會の人間は渾然たる一體を爲すものでない。それと同じく東京文化といふものが、大阪文化とか京都文化といふものと對立するだけ特異性を有つてゐるわけでない。唯、現代日本の文化的斷面を示すには、東京を取り上げるのが便利なだけである。

○

古い文化が殆どむかしのエスプリを失つて、新しい文化が未だ板につかぬ現代の日本は、强ひて言へば、植民地や新開地のやうな文化的雰圍氣を感じさせる。小林一三氏は流石にえらい。西歐でも第二流國のスペインあたりに比べてさへ、一般文化的には及ばないことを感じて、殘念乍ら日本は世界一の貧乏國だと喝破した。

まことに新しい東京は、モダンでもなく、シックでもない、コロンボやシンガポールと大差のない第六流の文化都市でしかない。貧乏國の上に、外來のものを先づ模倣し始め、從來の世界にすぐれた日本固有の文化を弊履の如く捨てた時代もあつたのだから、勢ひ貧弱且空疎たるを免れないわけである。

それも不幸にも、アメリカ文化の安價な見本が先づ輸入されて、しかもアメリカ程の財力がないのが日本である。所謂文化住宅などといふものは、印度やエジプトに居る文化人の住宅よりも三段も五段も低級なものである。アパートなどと云ふものも、二三の豪華版（?）を除けば、歐米の職工の舍宅位の程度だ。甚だしいのになると、アパートを共同の長屋と心得たり、むかしの湯治場の溫泉宿のやうな見方をしてゐて、顏役のやうなものが、懇親會を作つたり、半强制的に共同に、茶の湯、生花、長唄の御さらひをする會をこしらへたりするのさへ出て來てゐる。こんなことがいやであればこそ、アパートに住むのであるのに。

日本人の共同生活には利己主義はあるが、いい意味の個人主義がない。凡ての文化生活には、尤もいい意味の個性尊重がなくてはならない。正當の意味のアパート生活は、日本ではまだ始まつてゐない。恰も個人を尊重しない統制が成立せぬのと同じで、共産社會主義などが文化生活と相容れぬわけもここにある。

○

東京で日本中の方言が聞かれるやうに、世界中の文化の斷片が雜然と見られる。その基調は、どこまでもアメリカ趣味である。世界のアメリカ化は、歐洲の古い文明國でさへ恐れてゐるのだが、我が國のやうな固有のすぐれた文化を、第三四流のアメリカ趣味で傷けられるのは情ない。

例へば、日本人の眼は、色彩の調和については先天的にすぐれてゐる。むかしからの、婦人の衣物や能や歌舞伎の衣裳や背景の色合を見たら、我々が世界に誇つても足りない天禀の審美眼を持つてゐることは明白で、これは決して自己陶醉ではない。併しこの眼も文化的に見ると、現代日本人は少し怪しくなつて來てゐる。

近代女性の洋裝は、年と共に改善されてはゐるが、色の配合などは、多くはアメリカのうちでも低級な意匠の、拙劣な模倣以外の何ものでもない。澁い色のローブに、濃い茶色の靴下などをはくことは、四五年前にアメリカから出て世界を風靡したが、ヨーロッパでは間もなくすたれ、本場のアメリカすら流行おくれになつたのに、日本のスマートと自稱するお嬢さん方が、今でも盛にこの不調和を續けてゐるのは氣の毒だ。

流行がパーマネントだとなると、東京中の女の頭がぜんまいのやうになるのもをかしい。綠色が流行つても、肌、顏、髮、容姿等によつては似合はない人がいくらもあらう。況や西洋人の考へ出した流行に、これ程特異性のある日本人が、すぐその奴隷になるといふのは、文化生活そのものの冒瀆である。

○

西洋で東洋趣味が流行る場合でも、或は埃及、或は日本や支那の特徴をホンの一寸取入れるだけで、全體の調和を破るやうなことはしない。パリの洋服に、婦人の支那服の襟元や袖口や裾さばきが取入れられたり、日本の振袖の味やふり、美の攝取などが考へられたが、ハツピーコートや羽織と云つた流行はアメリカだけである。少くとも、ヨーロッパではアメリカ好みの少數者だけである。いくら流行でも、盲目な模倣はしない。

洋風建築も、東京を飾る文化の一面と考へられてゐるが、正直に言ふと、國辱七分、おなさけ及第三分ぐらゐのところであらう。

首都としての東京で一番うるはしい風景は、何と云つても宮城附近であらう。先年、日本に居た詩人大使クローデルは、毎日御濠邊に杖を曳いて、世界無比と禮讃してゐた。時には切なる詩情にうたれて、社交上の約束を忘れてしまつたこともあつた位である。その宮城附近の眺めには一つも西洋的なものはない。此の壯麗典雅を傷けるものが、警視廳から內務省、文部省、特許局に亘る廉價版官廳ビルディングである。

これらの官衙建築を見て、何も說明を聞かない旅客なら、誰しも異口同音に煙草工場の印象だといふだらう。これに比べたら、むかしは不調和を批難された司法省や海軍省の赤煉瓦の何と上品なことよ。そのむかし、いやいや乍ら見てゐた東京驛も立派なものだ。

ビルディングは、堅牢で實用に適すればいいのであるが、ホテルやクラブには、近頃のものに東京文化の誇りとなるものがないのは心細い。一番激しいのは帝國議會の建築だ。尤も議會制度がそろそろ時世遲れとなりつつあるから、建物も一國文化の粹を集める必要はないとしても、これはまた餘りにも甚だしい。

第一あんな重くるしい感じの建物は、日本人の頭とは調和しない。設計にも、斷片的に日本の紋章のやうな意匠が加はつてゐるだけで、何處にも日本的なものはない。日本文化の持味の清楚、典雅、枯淡、優美、低徊、何れもない。その積石一つだに、大和民族特有の精神らしいものは一つも現はれてゐない。國產と云つても材料だけの話で、一番大事な頭は西洋の拙劣な折衷混同である。純西洋建築としても低級なものと云ふべきである。第五流國の議院ぐらゐのところだ。

議會建築の內部はもつと甚だしい。首相室や閣議室の調度の色合を見て、われわれは何と感ずるか。壁、椅子、敷物の調和の惡さ、椅子に張つた織物は、炬燵を蔽つた緋鹿の子絞の掛布團といふ感じである。

その他の內部裝飾は、色の配合だけから見ても、日本人としては餘程趣味の惡い人の立案したものだらう。外國人などが、あれを見て一億を代表する新日本の文化の斷片と考へるやうだつたら、それこそ『國辱』になる。色以外の點から見ても、日本人の生活樣式から云つても、近代的の室內調度の研究には、まだまだ板につくまでに年數を要するであらう。例へば、日本中のホテルやレストランの國產椅子に腰をかけてみても、一つも氣持のいいのに出會はさない。

これは私一人だけの體驗ではない。

○

東京文化を代表する近代建築の最大の模型として、議會を擧げたが、この批評は、この大事業に當つた卓越した技術家、設計者、裝飾家等を批難する意味は少しもない。充分にその辛苦を買ひながらも、現代の輸入文化が如何なる水準に在るかといふことを高調したいためである。

唯こんな國民的文化的大事業が、いつの場合でも、官僚の事務として扱はれ過ぎてゐることは、日本の庶政の重大恨事である。

私は外の機會に、放送事業のやうな全國民を指導する文化的國家機關が、一省一廳の役人の古手の捌け口になつてゐることを嘆いた。これには非常な共鳴者を見出したが、議會建築なども、所謂專門家以外に、評議員の中にもつと畫家、詩人、作家、音樂家、文明批評家を加へるべきであつたと思ふ。『言靈の幸ふ』詩の國日本の藝術院に、一人も詩人が居ないといふ時代であるから、無理もないかもしれないが。

併し、歐米で、航空機や軍艦の設計についての最近の傾向は、すぐれた畫家に、繪としての、

卽ち藝術としての船や飛行機の形を描いて貰つて、一番調和のいいものを採用するといふ。この話の眞僞は不明だが、現代日本人が文化について缺けてゐるものを示唆する價値はある。

○

普通の家庭や集會では、食事の果物にフインガー・ボールを出さない。「おしぼり」が出る。この方面での日本は、正しく「おしぼり文化時代」である。これで辛うじて傳統的の清潔が保たれてゐる。汽車の食堂や多數のレストランでは、フインガー・ボールは出るが、テーブル・クロースは二度も三度も同じものを使ふ。江戸ツ兒の潔癖も、文化東京人には笑はれて來たやうに見える。

果物にナイフだけ出て、フオークの出ないのも、外來文化は低級で甘んずる覺悟の、おしぼり文化の表現である。

ダンスとカッフェは、現代東京文化の一斷面だが、不幸にして私はどちらも體驗がない。ただ一二度のぞいた印象では、この日本特有とも云ふべき、世界に殆ど類例のない二つの制度は、誠に中途半端なものである。あんなものに娯樂を求める我國の青年を、氣の毒に思ふばかりである。

アメリカなら黒人街にしかないタキシー・ガールのダンサーに、一々回數乘車券みたいなものをちぎつて渡して踊つてゐる。商品化されたステップに、何の感激と興味とがあるのであらう。ダンサーの居ないホールがうんと發展しない限りは、東京のダンス文化は、ニグロの水準に彷徨することになる。

○

耳と口との東京文化については、私は折にふれて感想を洩らしたことがある。最近に『耳を疑ふ』といふ一文を公にして、日本の指導者が、耳による文化や教育を甚だしく輕んじてゐることを指摘して置いた。ここでは音樂のことは姑らく論外として、あのラディオのアナウンサーの標準語の語調が、誠に堪へ難いものであること、音樂家などの外國語の歌の文句が大部分出鱈目の發音で歌はれてゐること、語學講座の大多數の講師のアクセントの慘憺たること、外國トーキーの字幕に出る邦譯に、一分間に三つか四つづつの割合で、原文の誤聽や誤譯があることなどを注意して置いた。

日本人の耳は、もとからわるいので致し方もないが、それを益々音痴にするのが、こんな問題に馬耳東風の現代の指導者である。街頭の流行歌のレコード攻めも、世界に例の少い東京文化の跋行風景である。

○

味覺から云つても、東京の雜居文化人の舌は、その靑年時代の下宿屋の臺所で墮落させられてしまふ。東京風の、砂糖で味をごまかす料理では、ものの眞の持味を傷けてしまふので、近年、關西料理が東京を克服したのも無理はない。

併し、日本料理に關西料理といふ一派があるわけではあるまい。江戸にもむかしから、今の關西料理と同じやり方がいくらもあつた。新式の、長崎料理や支那料理や、甚しいのは洋食の特徴を折衷した試みも、今一息であらう。

味覺に關する限りは、東京の文化は明治中期の法律書生輩が威張つた時代よりは發達してゐるだらう。就中洋食に於て然りと云へる。にも拘らず、現代東京の(況んや地方をや)洋食には、私は懼れをなしてゐる。何とかクラブで午餐に招かれて講演させられるときには、これがせめて新富ずしあたりだつたらと思ふのである。

この頃は若干のクラブで、竹葉の一圓辨當などを出すやうになつた。一段の進歩といふべきである。

繰り返して言ふが、洋食に限つて東京人があの潔癖を通さずに、汚れたテーブル掛、指洗の出ない果物などで、いつまでもおしぼり文化の平面を脱出しないのが不思議に堪へない。汚いことには平氣の支那でさへ、洋食には全幅的に西洋文化を採用してゐる。この點は、誠に日本人らしくないことである。

バチェラー博士の場合

アイヌ語及びアイヌ文化の研究に一生を捧げたバチェラー博士が日本における生活難のために、骨を我國に埋めるの決意を飜へさねばならぬのは、何と云つても遺憾の極みである。

日本の先住人種であるアイヌ人に關する研究は、今日こそ我國の學者間にも相當の發展を示してゐるが、明治の前半に於ては全くバチェラー博士を唯一の權威としたのである。

殊に我々の同胞の一民族たるアイヌ人に對する愛情と、それから出發したアイヌ人の教化厚生についての功績に對しては、何人も同博士が我が國家の恩人たることを認めないものはないと思ふ。

八紘を一宇とし、五族協和を唱へ、皇道精神を少くとも東亞に普及せんとする我が新日本が、原始時代以來今日まで日本の一民族たるアイヌ人の研究とその向上とに、一生を捧げた異邦の一偉人に感謝する途を知らず、その餘生を養ふことにも關心を示さないやうでは、誠に恥かし

いことではないか。

○

顧みれば、近頃文化宣揚の呼び聲が高くなり、文化團體は雨後の筍の如くに生れ、中には屋上更に屋を架するものもあり、その事業と稱するものを見ると、不急の古典を外國語に譯したり、詩吟や劍舞を外國に送つたりしてゐる。甚だしきは文化とは何ら關係なき團體までも、文化事業の名に於て、時としては政府や民間財閥などの支持を得てゐる。日本精神を看板にして、行ふところは最も甚だしい非日本的なものすら間々ある。

世界のあらゆる文化の長を採り、固有の文化に融合せしめた日本、百濟人の子たる坂上田村麿を最初の征夷大將軍に任じたほど包容力のある日本である。わが國内の一民族の研究にこれほどの貢獻をした異邦の學者であり仁者である、バチエラー博士の餘生を、その衷心の希望の如く、日本に於て安らかに送らしめる企てこそ、最も日本精神に添ふものであるまいか。政府も財閥も前述のやうな無用な文化團體などに與へる補助を節約して、この企ての實現に努力して欲しいと思ふ。

（此文章を書いて間もなく同感の士から多數の手紙を受取つた。そして同學の長友得能佳吉君が同博士の世話をされてゐることを聞いて、非常にうれしく思つたのである）。

讀史ところどころ

兵は神速果敢なるを尚ぶ。第一次大戰當時のカイゼルは二ケ月で巴里を拔くと豪語した。然るに他方では、キチナー元帥は四年目からがほんたうの戰爭だと言つた。長期に備へたものが勝つたのだ。

ハンニバルの第二ポエニ戰役は一擧にしてローマを拔く豫定であつた。二十三年前の第一戰役でカルタゴ軍の實力は知れてゐた。世界に君臨したローマも豪勇比なきハンニバルの侵入に戰慄したことは、ローマの史家リヴィ自身が語つてゐる。曰く、ローマは全く恐慌に陷つた。カルタゴほど果敢好戰の敵は曾てなかつた。ローマ共和國の士氣と戰備の缺けてゐたのも未曾有のことであつた、と。

此の强敵ローマを屠るのに、唯一人悲觀説を唱へたものがゐた。これがカルタゴのハンノーだ。彼だけはローマの底力について正しい認識を持つてゐた。曰く、對戰の長びけば長びくほ

ど、ローマの抵抗力は增すだらう。ハンニバルが無名の師を興して亡ぼさんとするものは、ローマにあらずしてカルタゴ自身である、と。

カルタゴとローマとを比較して見ると、軍備の充實、統率の伎倆、戰術の巧妙に於てローマは到底カルダゴの敵ではなかつた。ローマの味方は「時間」と資源だけであつた。短期迅速の決戰が行はれたのなら、勝利は勿論カルタゴのものであつたらう。云ひ換へると、ローマは待ち得たがカルタゴは待てなかつた。併しカンネーの大敗で、ローマ人自身が多くはハンニバルの豪語するやうに、短期迅速の決勝が迫つたと考へたのだ。リヴィ再び記して曰く、ローマ市に何の異常もないうちに、市民の恐慌興奮かくの如く激しい例は未だ曾てなかつた。ローマ人以外の國民であつたら、この慘劇の重壓で降服しないものは絶對にないだらう、と。

此の戰爭は十五年かかつた。ハンニバルほどの天才將軍も、ローマの「時間」と資源とスキピオとのコンビに向つては、竟に兜を脫いだ。ムツソリーニ御自慢の名映畫「スピオーネ」はこれを語つてゐる。

ハンニバルの敗因は全く敵を侮つた爲めである。二三の事實を見て、早くもローマの末路來れりと速斷したのである。

○

英國が末路に瀕したと世界が速斷した例は度々ある。尤も著しいのはアメリカ獨立戰爭の際であつた。

王軍が植民地軍に一敗地にまみれたとき、英人の覇業は終末に近づいたと考へられた。フィシャー博士の歐洲史に曰く、十日の見るところ英人は終りだと思はれた。ウェストミンスターの議會はワルソーの議會に比べられた。英人の政爭はボーランド人の亡國的內紛と同視された。英國の太陽は正に沈むと確信したのは、ブロイセンのフレデリック王、ロシアのカタリナ女王、オーストリアのヨゼフ帝のやうな强くして聰明な君主たちまでにも及んでゐた。相手國の實力を輕視して、再び起つ能はざる底の創痍を受けたのは正しく革命フランスの冒險であつた。大戰のドイツ帝國も亦、同じ例を繰返したのである、と。

一九一四年のドイツは、古代のハンニバルと同じく、また日露戰役の帝政ロシアと同じく、二大誤謬の爲めに傷ついた。一つは敵を侮つたのと、今一つは短期決勝の可能性を妄信したのとである。

今度のドイツは事ごとに前の失敗に學んで、見事企劃を立ててゐる。

日西文化關係の回顧

四世紀以前の世界の海上權を制覇したポルトガル人とスペイン人が、マルコ・ポールの東方見聞錄に出て來る「黃金の國」日本に來航して發見した最大の產物は、日本人とその文化、その精神、その民族性であつた。

これらの遠洋渡航者は商業的冒險者たると同時に多くは海賊であつた。海賊行爲が當時に於ては、野蠻人の住む領域に於て行はれる限りは、歐洲人の神樣から責められる程の罪惡ではなかつたことは知れてゐる。これら初代來航者が若し英米獨人でもあつたら、恐らく西歐は日本をもつと違つた觀點から認識し、別な動向を歷史に殘したに相違ない。世界は、日本の最初の發見者渡航者がイベリア半島人であつたことに大に感謝してよい。

かくの如き發見者中の最大の人物ザヴィエル上人はポルトガル人の宗教團體(「耶蘇會」の起源は勿論スペインに在るが)に屬して、日本へ來たスペイン人であつた。彼は恐らくバスク人であつたかも知れない。彼の舊蹟は今日のスペイン領バスク地方に在ることは誰でも知つてゐる。而して今日佛西の兩國人の中に同化し切つて居ながら、尙特異の國語を保持してゐるバスク人の風貌も言語の構成も東洋人特に日本人に似てゐるのは、學者の興味を以て注目してゐるところである。

ザヴィエル上人が彼の示した程度に端的に日本人の長所を感じ、その心をつかむに成功したのは、勿論彼の大德によるが、或はバスク魂が彼に、同じ血統かも知れない日本人を何の困難もなく理解させたのかも知れない。歷史の神祕は案外にも簡單な形式の鍵で開ける場合もある。

○

ザヴィエル上人が短い滯在のうちに、多數の改宗者を得てゐる、その感化力は驚くべきものであるが、その根柢には、日本人が印度邊境や南洋諸島民とは數段優位にある國民たることを認めたことが最大の理由であらう。彼も彼の後繼者とも言ふべき葡人フロエシュ(最初の日本史を書いた外國人)も、ともに日本人が素朴正直な資性や、文化、禮儀、技藝、武術等に於てはスペイン人にも優るとも劣らない國民だと述べてゐる。

中にもこれら南蠻の傳道僧を驚かしたのは日本人の好學心であらう。彼等は日本人がキリスト教といふ新宗教を欲したのでなく、西歐の文化と科學と戰術と貿易とを欲したことを知つてゐた。十六世紀の末に（天正年間）十四五歳の特派大使伊東マンショ、千々岩ミゲロの一行を法王廳に送つたのも、又ザヴィエルの場合は二人の日本の青年を同伴して日本を去つたのも、彼等を改宗することよりも、むしろ日本人を文化的に導くことに意義を感じたからである。

日本の學問に興味を持つた神父たちは、當時の日本の五大學——高野、伏見、比叡、根來、足利を見學して、就中足利學校が夙に一種の綜合大學を成し、他の佛教の僧院附屬の謂はば神學校に過ぎないのと較べて、敬服する値あることを述べてゐる。

日本の側でも南蠻文化は一世を風靡した。今日、日本語のうちに同化されて、現代日本人はその外來語なるを知らない多くの南蠻語がある。カステラ、コンペイトウ、ビードロ、ビロウド、フラスコ、カルタなどである。尤もこれらの若干はポルトガル語であり、同系のスペイン語と同じいものもあり、極めて近いものもある。日本人の信徒や求道者には南蠻語に通じたものも多く——ザヴィエル上人を印度から伴れて來た安次郎の如き——又神父連でフロエシュ等のやうに日本語を自由に語つたものも多かつた。

フロエシュと同じやうに恐らく日本語に達者であつたドン・ロドリゴ・ヴイヴエーロは、フイリッピン總督代理たるとき、難破して計らずも日本に來り、家康公にも謁し、一六一〇年には日西條約を結んだ人物であるが、彼は日本人の長所短所を遠慮なく書き殘してゐる。

彼の言葉に、『日本人は發明にも模倣にも敏い。西歐人がダイヤモンドやルービーの如き飾の寶石に法外な値を認めるのを、日本人は嘲笑する。物の値はその效用に在りと考へるからである。……』

更に彼は驚くべき陳述をしてゐる。

『もし余が萬が一にも余の神と國王とを拋つが如き決心になつた場合には、余は自國よりも此の日本國を選ぶであらう』換言すれば、彼はスペインを除けば日本を以て世界の第一國と考へたのである。

併し第十六世紀のスペイン人が、世界に未知の日本人の精神を容易く把握したのは、必ずしも、これらの神父たちの堅忍不拔の勉勵と異教徒に神を敎へる熱心の爲めだけではない。實際スペイン魂には誠に我々の心に喰入るばかりの尊いものを持つてゐる。日西兩國人の心裡に同じ血が流れてゐるからだ。最近のスペインの不幸なる內亂に於ても、日本人で誰かあのスペイ

ンの老幼男女を問はない義勇軍の奮戰振に感激しないものがあらう。防共の爲めに戰つたスペイン人は、西歐に如實に日本精神を見せて呉れたと我々は感じたのである。

スペインをよく知らない外國人は――日本人をも含み――此の國民を廢頽沈淪の過程に在る惰弱なものと誤解してゐる。併し我々は史上に見るスペイン人の不休進取の精神、そのお蔭でアメリカを世界に加へることの出來たあの強い精神が、三世紀や四世紀で消えるものでないことを知つてゐる。スペイン人が過去を不滿とし現狀を不滿とし、力の限り政治にも文化にも藝術にも新しき天地を求むるの精神は全く日本人の精神である。

ゴーヤからピカッソーまでのスペイン藝術に日本人は魂の共鳴を感ぜずには居られない。ゴーヤはむかし過ぎるが、今から見ても殆ど神様に近い。ピカッソーはマラガの產であるが、謂はば或る批評家の言の如く、整形藝術の總本山の巴里での『宮廷』畫家になり過ぎた。併し美を索めて偶像を排斥する精神、換言すれば觀念に生きて形式を殺す東洋思想こそは、日本人の眼にピカッソーを偉人とし、日本精神を藝術に表現したものと考へさせるのである。今日の日本で苟くも繪を語るものは、ピカッソーの精神に悟入しないものは罕なほどである。これは恐らくスペインよりも古いものであらうが、どこどこまでもスペイン的であることは疑ない。

○

日本人とスペイン人との相互の理解を容易（たやす）くした樣々の民族性の共通點のうちに、最も似通つたものは、その傳統を重んずる精神と、それにも拘らず新しいものを探求する精神であらう。この二つのものは多くの國民に在つては竝立しない。然るに古い傳統や因襲を重んずること西ではスペインにまさるものなく、東では日本を超えるものはない。鬪牛と相撲とはいづれもこれを證明してゐる。他人の眼にある梁（うつばり）を最も敏感に見る英語國民は、鬪牛を人道的見地から批難をするが、今日はその殘忍性を和げる改良が施されて、尙古の傳統の精神は保たれてゐる。日本の相撲が若干の修正を經て古式のままに行はれてゐると同樣である。この民族性が又同時に新しき刺戟、新しき思想、新しき生活樣式を最も熱心に追求するのである。過去に不滿を抱いて外來物を崇拜するのが、曾てのスペインに多くの左翼思想とアナキスムとを生むの弊を招來した。それと同じく日本にも明治年代に歐化思想があり、二十年程前に左翼思想の萌芽があつた。スペインの青年は一時口を開けば自國の惡口を言つた。一ころの日本のインテリゲンツィアにもこの病があつた。しかも反語的であるが、此の兩國民とも甚だしい御國自慢の民族に屬してゐるのである。

スペインには中世と二十一世紀とが肩を竝べてゐる。スペインの大都會ほど近代的な色の鮮やかなものはない。東洋の血の流れてゐるハンガリアのブタペストに範を取つたと言はれてゐるが、確に東洋の匂がする。スペインの都會が日本人の心を惹くのも、必ずしも髪の黒いスペイン女が世界の麗人の最高なるものと日本人が感ずる爲めばかりではない、何處かに東洋の魂をほのめかすものがあるからだ。現に日本で最も良いと言はれてゐる大阪地下鐵道は、スペインのやり方を多分に採用してゐる。日本の空には最新式の航空機が飛んでゐるが、地上には三百年前と殆ど同じい髪を結んで、同じやうな衣服を着てゐる婦人が歩いてゐる。セヴィアにある近代式アパートから「マンティラ」をかぶつた女が出て來るのと全く同じである。

日本人の鄭重慇懃なのは世界的に有名であるが、スペイン人も歐洲では最も多く此の特徴を備へてゐる。日本を旅する外國人は、例へば汽車などで未知の隣人に菓子や果實やタバコなどをすすめる習慣のあることを知つてゐる。此の習慣と共にややすたれつつあるのは、知人が豫告なしに訪問して來たとき、家族の食事の中に此の來客を加へて、招かれざる食卓に列席させるといふ日本の傳統である。スペインでも汽車旅行などでは必ず此の不意うちの晩餐に招待される。學者はこれを原始社會の遺風と考へて居り、モロッコなどにある此の風習については、

ウエスターマークは、側で眺めてゐる人の邪視で食物が毒せられる考へから起つてゐると說明してゐるが、何れにせよ近代生活に於ては、こんなホスピタリティの床しい風習が、日本に於てもスペインに於ても消滅しつつあるのは遺憾と云つてよい。

○

日本とスペインとに共通した生活の斷片、文化の樣式は、數へ擧げると限りもないが、何人も直ちに想起するのは音樂と舞踊とであらう。

スペイン舞踊の驚異は、それが世界のあらゆる舞踊の何れの範疇にも屬さないことである。その意味では、やや日本舞踊に似てゐる。唯世界舞踊の三大別から言へば、歐洲風の脚の踊、即ち歩を踏む正統派のバレーのやうなものに對して、第二種の主として腕と手とを使ふジヤヴァ舞踊に日本舞踊は接近してゐるだらう。併しスペインは此の二種の何れにも屬せず、又第三種たるアフリカや西方アジアに在る身體の筋肉が主なる役割をつとめる踊とも違つてゐる。スペインの舞踊は此の三大範疇の何れにも屬さないが、そのいづれをも包含するのだ。而してその全身を用ゐる要求から云へば、ややもすれば放縱野卑に陷り易いものであるが、スペインでは審美的情操に敏い爲めと、スペイン人の民族性がこれを極めて品の良い優雅な形に保持

してゐる。これはスペイン人の直覺的品位と自尊心の爲めであり、又禮節を重んじ儀式化を好む性質から來てゐるのであらう。宗教上の儀禮と鬪牛とだけを見ても、此の民族性は明かになる。而して不思議にも東洋では我が日本民族が一番類似の性格を持つてゐる。日本の非輸入舞踊が、いづれも儀容禮節を重んじて野卑に陷らないのは誰でも知つてゐる。日本で最も人氣のある音樂と舞踊が、例へばタンゴ、ルンバの如きスペイン的旋律であるのも偶然でない。

スペイン音樂を所謂フラメンコ舞踊としてジプシーから出たものとするのは本末を誤つてゐる。ジプシーがスペイン音樂を學んで傳へたものであらう。併しギリシアからアラビアまで地中海とアフリカとの產んだリズムを、その主要なモチーヴに採用したものがスペイン音樂であらう。アラビア音樂が東へ渡つて、所謂大食調として我邦の雅樂に名殘をとどめ、西では恐らくモーア人を通じてスペイン音樂の基調を形づくるに參加したのは、誠に面白い對照である。

偶然ではあるが、日本でも封建時代の慣習で、明治の初年までは歌舞伎役者を「河原乞食」としてさげすんでゐたが、スペインでも此の國民的藝術を輕んじて、舞踊家を一種の浮浪人——アソタカイエスなどと呼んでゐた。あるアメリカの作家が、スペイン旅行記を綴つて、『カスタネットの國』The land of the Castanet と題し、スペインをヴァレラの如き文豪でもこれを憤慨したといふ。日本を The land of the Geisha-girls などと云へば、日本人もあまり愉快に思はないが、スペイン踊りと同じく日本の民衆藝術には日本人の民族的特性を如實に示すものが多い。支那や帝政露國では藝術は「エリツト」の鑑賞物であり、所謂士大夫か大ブルジョワ以外には、覗くことを許されない境地であつた。これに反し日本でもスペインでも、國民の間に發達した藝術は直ちに民衆のものとなり、民衆の中で發達向上してゐる。此の意味では兩國民は最もいい意味での民主的性質を備へてゐる。特にスペインの多樣な舞踊の中には所謂ジプシーダンス卽ちフラメンコの如く、觀衆が全部手をたたき、足を踏んで舞臺の踊に和するものがある。ここでは藝術家と民衆とは見事な合作をしてゐるのである。

スペインでは舞踊は單純な歡樂ではない。民衆の血となり肉となりつつ、その魂をはぐくんでゐる一つの社會的設備である。如何なる通過客でも、日本の京をどりとスキヤキを忘れないが如く、スペインのカスタネットの齒切れのよい音とヴァレンシアの米料理を忘れ得ない。

○

日本、スペインを語つてその女性を無視してはならない。

此の兩國民の女性は、世界のうるはしい女性のうちでも最も優美典雅を以て知られてゐる。

公平に言ふと世界の最高美人はイギリスとスペインに在るといふのが學者の定説であるが、イギリスの美人は世界一かも知れないが、その數の少いのは日本以上であり、その點では量に於ても質に於ても、スペインが世界の覇を稱へ得るのであらう。

スペインの女性が男性よりも優秀だとの説は必ずしも根據がないことはない。七百年にわたるモーア人の戰、つづいて宗教裁判と列強との爭覇で、スペインの核心を爲す男子の數が激減したことは歴史が證明してゐる。尙武と勇氣の點でもスペインには多くの男まさりの女がある。日本にも巴板額に乏しくないが、スペインの歴史には無數の類例がある。最近の內亂に於ても、彼等の娘子軍が如何に苦難に堪へて善戰したかは、世界の驚嘆に値したところだ。

スペイン女も日本女も本質的には家庭の人である。最近までスペイン女性は殆ど中世的且東洋的な內に引込む習性をつづけてゐたが、この點では日本の方が遙に非東洋的である。唯內的生活から來る女性のチャームに至つては、双方とも全く他の國民にすぐれてゐると斷定出來やう。これは必ずしも双方とも小さな手足、巨大ならざる體軀に基く爲めばかりではない。而して偶然にも双方共衣服も髪も獨特の傳統を持つて居り、不幸にして近代生活は此の二つのうるはしい女性の裝備を減滅させつつあるが、今日でもセヴィアの春祭や日本の婚禮などを見れば、日西の民族の傳統に他の模し得ない特徴があることを知るのである。他の何れの國民に、あのショール、高い櫛、マンティラを着せて、あの優雅を實現出來やう。あのキモノと帶と島田髷が、他の何國人の女にふさふであらうか。

スペイン女の特徴は強くしてやさしいのに在る。人は往々オペラのカルメン、卽ち佛人のメリメの書いた戲曲を佛人のビゼーが作曲したものを、スペイン女の典型であるかの如く誤解する。併しこのオペラはジプシー女の無軌道な情熱を描いたもので、スペイン女の姿を描いたものではない。「吉原」や「本牧」の女を日本女性の通例と云へば、如何なる日本人も斷じて賛成しないのである。

近代法制の設定された以前のスペイン女は、今日よりももつと男女平等の權利があり、家庭の人でありながら、もつと獨立と自由とが有つた。あの固陋と云はれる程のカトリックの信仰に凝りかたまつてゐるスペインで、未婚の母もその私生兒も、さまで社會的にも法制的にも輕んぜられて居ないのは、これを物語つてゐる。此の點では近代法制以前の日本の女性にも類似の事實がある。

序ながら世界の演劇史でスペイン女が初めて女優として舞臺に立つたことも今は證明せられ

てゐる。沙翁劇には、日本の歌舞伎に於けると同じく男優を女形に用ゐたが、スペインでは一五三四年の勅令に女優のことを掲げてゐる。

もし近代の所謂學校教育が、如何に意味の少いものであるかを知らんと欲したら、スペインの女性と日本の近代教育輸入以前の教養ある婦人とを見れば足るのである。誠の智惠と、生活に必要なる根本認識と、あらゆる事物に處する實際的タクト、これがスペインでも日本でも女性の眞の價値であつた。惜しむらくは此の兩國に於ても、外と同じく、所謂「教育」が此の自然の特質をスポイルし始めたのである。

○

日本とスペインとの文化的精神的特徴に多くの類似があり、親和性のあるうちに、將來の世界の文化振興に貢献し得る最大の要素が一つある。それは此の兩國が「人性の威嚴」について他國民よりも遙に正しい感じを持つてゐることである。武士道はあまりに階級的であつたが、併しいにしへの士道は今日の平民道であり、近代の資本主義經濟は民衆を驅つてマンモンの奴隷に化したに拘らず、商人根性は今でも此の兩國で卑しめられ、實業は人間最高のものと考へられてゐない。スペイン人が財物の富を以て必ずしも尊敬の對象とせず、金錢問題の入らず、頭腦と心情とのみが大問題たる事業を偉大と考へて居るのは、我國の「武士は食はねど高楊子」の表現はやや消極的であるが、富を崇拜せず、物慾を追はず、『清貧』といふ境涯が甚だしく尊敬さるる誠の日本精神と酷似してゐる。

資本主義經濟が相當徹底的な修正を經つつある現代國家に於ても、これに代るべきものが、民衆をして形を變へた物慾の奴隷たらしむる限りは、世界はいつまでも百鬼夜行の地獄であらう。

近代國家の試煉を嘗めてゐる日本、その試煉で更生しつつあるスペイン、此の兩國國民の民族精神の傳統に根ざす尊い非唯物思想こそは、世界の文化的秩序の大變革に大なる示唆を與へ、大なる寄與を爲すべき無上の使命を持つものである。

文化史上に於てスペインと日本とは重大な役割を演じた。暗黒の中世に辛うじてサラセン文化を通じて西歐の科學の命脈をつないだのは全くスペインのお蔭であつた。近代の曙光が東洋を照し始めたとき、夢の如き黄金の國、日本に歐洲とその文化宗教を知らせたものはスペイン及びポルトガルであつた。東洋にもかくの如き文化の領域あることを西歐に傳へたものも彼等であつた。かくの如く貴き歴史的使命を世界文化史上に果し得たスペイン、日本の兩國民に、

將來の世界は如何なる役割を約束するであらうか。以上述べ來つた兩國民の民族性が、唯世界のツーリストを悦ばす爲めに存在するものとは、如何にしても考へ得ないのである。

時務隻語

國際宣傳戰

(上)

敗軍のカイザーは長嘆して、「ドイツは戰爭には敗けない、しかし聯合國側の、特にイギリスの宣傳には負けた」といつた。

實際宣傳ではドイツ側の方が一足先に出てゐたのである。アメリカの新聞界と大衆の財布を目的にする商賣の宣傳振とは夙に世界に範を垂れたが、そのアメリカの遣り方を一〇〇パーセントまで習得したものがドイツであつた。

アメリカの參戰以前は獨系米人、別してユダヤ財閥に關係のある連中は、米國民衆をドイツ側に惹きつけてゐた。アメリカの參戰後でさへ、議會の審査によると若干の米國新聞はドイツに買收されてゐた。大戰前からドイツでは列國に先んじて外交と宣傳とを結びつけてゐた。ア

メリカの商賣人がやる宣傳の祕訣、卽ちニュースを歪めること、ニュースを作ること。この二つを手に入れたドイツ外交はドイツ商品の先驅になつて、南北米はもとより支那からトルコまでの市場を獲得しようと試みた。もとよりドイツ人の十八番である「文化（クルツール）」を賣物にすることを忘れなかつた。ドイツの學問、ドイツの市政を吹聽した交換敎授、學者の講演、文化展覽會、音樂等はその手段に使はれた。

ナウエンに放送局を造つて、電波で宣傳をし出したのもドイツであつた。幸か不幸か今日ほど無電は發達してゐなかつたので、西はメキシコ、東はペルシヤまで電波の音域を進めたにも拘はらず、今日ほどの效果はなかつた。しかしこれに當つた專門家のドイチエモーザ少佐や、それに代つたニコライ大佐の名は永久に殘つてゐる。

戰爭が進むにつれて英佛側は段々對外宣傳の效果を覺つて、結局はドイツを凌駕するに至つた。

アメリカの參戰前後に、筆者は親しくアメリカ中を巡回講演してゐる英佛の宣傳員に出會つた。フランスの軍人は戰地から來たばかりの姿で壇に立つて、さまで流暢ではない英語ではあるが、一々實感を伴ふ解說をもつて獨軍の殘虐行爲について述べ立てた。

宣傳はかくの如く客觀的の事實を基礎にするだけでは足りない。敵國側の宣傳が虛僞だと責めるのは、歷史的眞理のためには必要なことではあるが、抗敵する國家の間では宣傳の防禦側は何時でも立ち後れである。本當の記錄によると、ドイツ軍のベルギーに侵入した時の軍隊の規律は、寔に目擊者を驚かしたほど嚴正なものであつた。戰地から歸つたジェラルド・モーガンは、ドイツ軍に比べるとフランス軍はジプシーの列車のやうだと形容した。

ドイツ軍が本當に多少の苛酷なことをやつたのは、その後大本營の命令によつたのであつた。當時益々戰線が擴大して守備の軍隊を節約するため、その占領區域の住民を平定する必要上、非戰鬪員でも苟もドイツ兵に銃口を向けたものは、直ちに銃殺せよとの命令を下したのであつた。

あの有名な看護婦エディス・キヤヴェルを死刑に處したのも全く同じ方針からであつた。ドイツにとつては不幸にも、この例は聯合國側の思ふ壺にはまつたのであつた。ドイツの學術は世界に誇る優秀なものであるが、ただ、實踐心理だけは落第といはれる。外國人の心を讀む點ではドイツ人は英佛人に著しく劣る。宣傳に最大の要件が缺けてゐた。

ロンドン、パリの空襲も潛水艇の活躍も同じくドイツ側を惡者にした。ほんたうは當時の空

襲は大した損害を與へなかつたのだ。潜水艇にしても、ドイツ側は英國の封鎖がドイツの非戰鬪國民を餓死させるから同じく野蠻ではないかといふのであるが、封鎖の方は單なる抽象の觀念として頭に響くが、潜水艇の方は女子供が氷のやうな海の中で、一人一人悲鳴を擧げて沈んで行く樣が實感として目に浮ぶ。肉眼で見る者十人に對して心眼を働かすものは一人に過ぎない。ルシタニヤ號事件がアメリカをして、ウイルソンの平和主義にも拘らず、聯合國側に參加させたのである。

（中）

國際宣傳の最大要諦は相手方の理解にある。相手方の頭にピンと來ない理窟を、くだくだしく繰返すことは、却つて反對の效果を齎す。前に述べた大戰當時の官僚ドイツの物のいひ方は、近頃の官僚日本のそれに餘りにも似てゐる。日本の文官制度がドイツ式の法律づくめで固められてゐた明治の遺習が、今でも禍を爲してゐるのだらう。官製または官の息のかかつた宣傳映畫を見れば、その相手を無視した獨善的くどさを感じないものはあるまい。

宣傳の强さは攻撃にあつて防禦にない。嘘八百でも、先入の報道を取消すのに十倍の力が要る。日本の發言はむかしから辯解と釋明とで後手に廻つて苦しんでゐたが、支那側の傳統的な宣傳上手に後れて立つ國民使節などの苦心は察するに餘りある。嘘はいづれも露れる。嘘であつてもなほ日本の方が悪いと考へてゐる相手を說得することこそ、眞の宣傳の效果ではないか。

少しも嘘を交へない宣傳に眞の力がある。映畫などは如實に撮つたものが、編輯の仕方で如何なる效果をも擧げ得るのである。日本の宣傳は公平に見て、凡ての意味の編輯が悪い。なかんづく映畫でいふ「デクーパージュ」が悪いのだ。

この意味での支那側の最大傑作は、先年上海の「ロイター」が取次いだニュースである。英國では親日に近いと思はれる新聞でさへもこれを載せて、この記事はセンセーションを起した。それは上海の子供たちが、英國國王の二王女、エリザベスとマーガレット・ロウズ二殿下に送つた手紙と稱せられるものである。曰く、

「偉大なる貴國民がスペインのビルバオから避難した小兒たちに如何に親切であつたかを長者たちが話してくれました。また王女殿下たちにこの戰爭のことや政治の事を申上ぐるのは嚴禁だと聞きました。

長者の言には背きませぬ。唯一つこの通信を貴國民に御示し下さるやう御願ひをするだけ

です。我等の多くは家庭を失ひました。また親兄弟姉妹まで失つたものも相當にあります。貴國の子供たちに私共を助けて頂けませうか。

こんなことを申上げたのをお怒りにならないやう、貴殿下たちの偉大にして親切なことを知つてゐます。輝く貴王室の萬々歳を祈る。」

これは子供のいふことに一つも嘘はないまでも、英文を如何にも支那語の譯文のやうに見せたところから、編輯または代作と想像され、殊にビルバオなどを引用した點が訝しいのである が、宣傳價値からは正に滿點であつた。パネー號事件のときわが國少女たちの眞心こめたデェスチュアは、これに比べて何百萬倍の眞實であるが、效果はなきに勝る程度であつた。勿論宣傳を目的としたものではなかつたが。

宣傳も文化工作も火事場のやうな際物扱ひは、大國としては威信にも關する。平常無事の日でも、足一たび國外に出づれば、凡ての日本人は皆文化大使であるべきだ。況や海外にある大公使や、銀行、實業、操觚界などの駐在員をや。併し遺憾ながら今のところ、少數の例外を除いては、日本文化の本質特徴を正當に認識し、これを有效に外人に理解させ得る者は何ほどあるだらう。日本精神から延いて東洋文化の解説をなすなども難事中の難事だ。俳句の妙を外國語で説明して見ればすぐ氣のつくことである。

指導階級に文化的訓練を施すのが文化輸出に先だつ急務である。外交官などには日本や支那に文化のあることを知らないのもあり、駐在國の文化にすら全く無關心なのが多い。まして實際は、あまり一國の文化などに精通すると首が危いのである。

數年前ピエル・ロティの葬儀のとき、巴里駐在の凡ての國の大公使が、遙にスペイン境のアンデーまで行つて、遺骸の前でロティの讃辭を述べて弔意を表した。別しても彼の作品に緣故の深いトルコの大使の演說は最も注意をひいた。然るに「お菊さん」の故國からは書記官の代拜すらなかつた。不在が最大の注意を呼び起して、ある新聞は驚き且憤つたほどであつた。

昨年巴里の萬國博覽會における日本部が、國威を發揚したか否かは知る人ぞ知る。英國部では、模型人形に著せたスポーツ衣裳すら、議會の問題となるほどのものであつた。

（下）

列國の宣傳省乃至情報部は、今日は主として逆宣傳に從事して大童であるが、對外の言論機關の指導に重きを置く時代は去つて、何といつても大衆にアッピールする映畫と放送に主力を

注いでゐる。

事變のやうな際物のニュース映畫を別にして、今日國策の要具たる對外映畫は記錄にせよ、芝居にせよ、音樂映畫にせよ、完全に商業化されてゐる。世界中が高價を拂つても悦んで見るところに宣傳價値がある。劇場の借料を拂つてやつたり、お客に招いてご馳走をして、やつと見てもらふ日本の宣傳映畫などは、まだ國策の要具たる水準に達してゐない。筆者の考へでは日本映畫を今日の百倍程いいものにしたら原版の日本語のままで、各國語の說明をシュパー・インポーズすれば、世界中に羽が生えて行くと思ふ。英語またはアメリカ語の解る觀衆が、例へば歐洲で人口の何分の一であらうか、それでもホリウッドは世界の制覇權を、ほしいままにしてゐるではないか。

廿世紀は空中の時代だ。戰爭も宣傳も地表を離れて行はれる。短波が山や洋をこえて地球を一周する今日では、平時の空中戰は電波で勝敗を決してゐる。送信も七年程前には五十KW以上のものは殆どなかつたが、今日は百乃至百五十KWが六十七もあり、二百乃至五百KWが三臺もある。アビシニア戰爭中には、アヂス・アベバの二キロの放送が、七千マイルを隔てたアメリカの市民に、國王の聲を聞かせた。

電波による宣傳戰では國語の國境と政治の國境との一致せぬのが、重大な役割をつとめる。アルサスや上部シレジアの言葉は滿洲國の支那語と同じく、厄介な問題を起す。ドイツのワイマール共和國時代には、ポーランドと空中電波不可侵協定を結んだほどである。

現にイクリアにある二つの短波放送局が世界の宣傳戰のトップを切つてゐる。ローマのプラート・スメラルドのは十三ヶ國語で、日本語のもやつてゐる。南伊のバーリからアラビア語で「ニュース」の形で、パレスチン、エジプト、イラクなどの近東地方へ、フアシスト政治の偉大と回教民族の守護者たるムツソリーニの大使命とを放送する。序に時事を『解說』して、イギリスの東洋民族に對する野望とアラビア愛國者に對する殘虐とを論ずることを忘れぬ。英國も英語を世界語と威張りながら、おくれ馳せに六ケ國語の放送をはじめた。

英國は短波機を六つしか持たぬが、ドイツはオリムピック以前に早くもツエーゼンの八臺があつた。電波に乘せて、アメリカの、血は水よりも濃い獨系人に親しみを寄せ、南阿へはアフリカーン語で植民地要求の正しいことを說き、南米へは西、葡語でドイツ音樂と機械の世界に冠たることを教へてゐる。

わが國では宣傳も文化工作も國策の要具たる認識が足りない。多くの言說は口頭禪に過ぎず、

陣容の整備も人材の動員も、いささかもピントに合つてゐない。

東亞の安定勢力と稱する日本は、支那以外の東亞の諸民族に何を呼びかけたことがあるか、日本の國策にこんな手近の宣傳すら含まれてゐないのを見ると、日本では短波の利用よりも短見者の克服が急務であらう。

英國外交の舞臺裏

英國の外交は變通性を以て知られてゐる。

英國外務省の外交が、固定したイデオロギーで動くと考へたり、立憲政治の母國であるから、萬機公論に決するものと考へたりするのは甚だしい間違ひである。

チェンバレン首相が、ムッソリーニに一書を送つて接近を求めたり、ハリファックス卿にヒットラーを訪問させたり、目のあたりに變幻きはまりない融通性を見せてゐる。何も知らぬ大衆は、一體英國はドイツを敵として軍備を固めてゐるのか、フランスとの友好關係を基調としてゐるのか、民主政治と集團保障との旗印に忠實なのか、獨裁政治にも敵意を持たないのか、矛盾撞着止まるところを知らぬ現實の裏に、何があるかを知らぬ。抑々一貫した大英帝國の外交方針は何處にあるのであらう。

一國の外交政策には、繼續性があるべきだ。政府が變り、反對黨とこれに煽られる輿論が騒

いでも、確乎不拔の主義方針はあるべきだ。聯盟規約の様なものが一片の紙屑となつても、大英帝國の國策の根本は變らぬ筈である。

英國外交の變通性を知るには、近時のエチオピヤ戰爭を繞るイタリアとの對立、スペイン動亂を機會とした獨佛伊との交涉を見るに如くはない。英國外務省の根本方針はイタリアが英國の權益を害しない限りは、その遠征攻略に異議を挿まないことにあつた。十年以前の北アフリカ勢力範圍の協定が、英佛間の商議の目的であり、一九三五年一月、アビシニアの將來の問題が、ムッソリーニから提起されたときも、マッフイ委員會の報告は正しくそれであつた。イーデン外相の、エチオピア問題ではイタリアとの衝突をさけて、又聯盟に附議される様な不手際のない爲めに、ゼイラを讓ると云ふイギリスにとつては寬大極まる提案も素より同じ流を汲んでゐた。斯くの如くにして、ローマ、パリ、ロンドンの外務省は妥協案を作つて、當時の外相サア・サミュエル・ホーアがパリで署名した。一つ困つたことは、イタリアもアビシニアも聯盟の一員であつて、英國の民衆は、正直にも何時の間にか、列國協調して戰爭を止める聯盟主義の敎育を受けてゐたのであつた。この輿論は勿論政府に聯盟の政策を、强ひて採用させる力はなかつたが、政府が新に變ると、新內閣に先づ聯盟の政策を實行する約束をさせるだけの力はあつた。勿論英國の外務省はこの聯盟の政策を、現實に遠い理論乃至はナンセンスとすら考へてゐたのである。對伊制裁を主張しながら、間もなく率先してこれを撤回し、聯盟は最早難關を克服する機關ではなく、むしろ昔のヘーグの平和會議の様に、平和主義者が理想論を演說する無害な機構として置く方針を世界に向つて確認したのである。ラヴァル・ホーア協定は輿論の爆發の爲めに、ホーア外相を辭任させたが、その爲めにアビシニアが救はれた譯でもなく、聯盟が威信を加へた譯でもない。むしろ英國の政策を正直に大映しにして世界に見せた效果があつただけである。

スペイン動亂は、外務省の變通性をいよいよ明かにしてゐる。政府側を助けたなら、イタリアとの關係は到底和平を得ない。干涉を默認してゐたのもその爲めであるが、他方に於て、內心ソヴィエットや、人民戰線派を嫌ひ、赤化を敵としてゐる英國外交の傳統を以てしても、フランコ將軍側の勝利を切望する心持は斷じてなかつたのである。不干涉と地中海の海賊事件で、情勢は一起一伏しながらも、ムッソリーニのバレアリック島に就いての保障を得たり、其の他の地中海の航空根據地についても言質を求めたり、又パレスチンの反英放送を止めてもらつたりする目的は取敢へず達したのである。結局はアビシニアの併合を事實上承認し、フラン

コ側の勝利を可能ならしめる様な取極めに、たいした異議をも唱へないままに、事態は自然の推移で變つて行つた。フランコ政權はスペインの三分の二を占領し、この中に英國の利權に屬するものが多數に上る爲めではあるが、イタリアとの接近を眼中に置かないで、この事實上の承認にも當る措置をする筈はないのである。

地中海問題よりも、もつと危險なのがドイツ問題である。勿論ドイツに對する態度は政治家の中でも區々であり、チャーチルの如き有力な保守黨の中にも、ドイツに接近するの困難を冒すよりも、聯盟を改組してファッショの進擊に備ふべしとする意見もあるが、外務省、換言すれば現首相の外交政策は、むしろドイツを宥めるために、ドイツが中央又は東南ヨーロッパに進出する場合に、英國がこれを阻止する意味の義務から足を拔くことにある。聯盟規約に繫がれては居るが、これはもう無視してもよからう。併しフランスとの同盟は逃がれやうのないものだ。英國の國防線がライン河にある以上は、此處から足を拔くことは絶對に不可能だ。これ即ち英國外交が二面の怪物の如き變形を呈してゐる所以で、對獨政策を見ると、フランスとの軍事上の全面的協同を約しながら、フランスを他の同盟國から離間したり、獨波協定に同意したり、佛「ソ」條約を嫌忌してみたりするやうな變調を呈してゐる。ベルギーの中立宣言、ヒッ

トラーのライン進出は云ふに及ばず、最近のトルコの內閣の更迭まで一としてフランスが、歐洲外交の指導的地位をイギリスに奪はれたことを示さぬ物はない。斯うなると英國の軍備擴張は何を目的とするのであらう。ドイツに備へないのが眞ならば、世界のファッショ・ブロックを敵とするのでもなからう。恐らくドイツの膨脹を東方に向けさせる、一つの取引上の强力な捨石であらう。外交と軍備とが、ピッタリ息を合せて動けば世界の敵は悉く味方とすることが出來る。これが英國外交の信條だ。鐵砲を擊つよりは、擊たずに獲物を分け合ふ方が、算盤勘定から見ても引合ふからである。英國外務省は誰よりもよくこのことを知つてゐる。英國外交の基調は、この算盤勘定を典據とした確乎不拔な自國本位の權益擁護、且つ增進である。

○

英國外交の不信はヨーロッパでは諺になり、ペルフィド・アルビョン（不信なる英國）大陸側からドーヴァ海峽を渡ると、白堊の岩窟が波際を縫つてゐるので、英國を「白」（アルビョン）で現はすのだ）の名で知られてゐる。英國は味方としては賴りがたく、敵としては恐しい。自國の利益以外なにものもない、その現實政策に手を燒いた列國は、何時でも猜疑の眼で英國を見た。敵か味方かわからないと云ふことが、屢々歐洲政治家の頭を惱ました。ピーター大帝は『英國は國內分裂し、

その政策變化極まりなし』と云つた。十八世紀のオーストリアの外交家カウニッツは英國を評して『かくの如き不可思議なる政府相手には、實に何事をも信頼する能はず』と書いてゐる。古いところで、エリザベス女王の政策には、フランスの國王も、ハップスブルグの皇帝たちも、度重なる豹變に手を燒いた。十八世紀の初頭には同盟國を裏切つて、フランスと有利な條約を結び、フレデリック大王ですらその出沒に煮湯を飲まされ、老獪極まるオーストリアのメッテルニッヒでさへ、キャンニングの政策には手が出なかつた。

英國外交には固定の主義はない。この點フランスなどとは全く違つてゐる。千年を通じてフランスの外交政策を貫くものは、主力を盡して、ゴール人の遺産を爭奪し、これを擁護するにあるのだ。シャルマーニュからナポレオン、降つて歐洲大戰のフォッシュ將軍に至るまで、フランスは、この傳統の爲めに戰つてゐる。そして外交はそれを裏付けるものに外ならない。

イギリスでは外交といふものには方針がない。十九世紀の中葉ヴィクトリヤ女王が、パアマーストンを免じ、グランヴィル卿を外相に任じたときに、女王から、『我が外交政策の基調竝びに、その達成方法如何』との御下問があつた。外相はハッとおどろき、當惑の色を示したと傳へられる。そこで首相のジョン・ラッセル卿が外相に代つて『我が外交は、當面の情勢に適應した協定以外は、一切爲さざるを以て根本方針とす』とお答へした。これは何事をも答へてゐないのであるが、前の現實に卽して流るるが如き變通性を仄めかしてゐる。

斯くの如く千變萬化、多岐複雜を極めてゐる英國外交にも、根本の方針が二つある。一つは自國の安全であり、一つは外國の勢力均衡である。島國の安全は海軍を以て、その脅威を除くだけの實力を養成させた。食料を海外に仰ぐ以上、海運のお蔭で生命を維持するのだ。大英帝國の優越を擁護してゐる根本が海軍であり、この海外領域を侵され、貿易通路を脅かされる場合に初めて實力を行使し、强力なる敵國がその對岸の白・蘭の中立を侵す場合以外は、斷じて危險を冒さないのがその傳統の政策である。勿論歷史上には、海外の人氣のいい主張に同情して、時には外交上の勢力を用ゐた例もあるが、これは本筋から云へば寧ろ贅澤であつて、自國の安全が保障される限りは手を出さないのが、その傳統である。從つて相對立する二つのイデオロギーに對しては、何時でも中立である。英國は所謂『持てる國』卽ち現狀滿足國ではあるが、これを人民戰線側のブロックに入れるのは非常な誤だ。聯盟規約の義務を引受けてもこの根本方針に變りはない。空軍を三倍に擴張したのも、規約を守つて共同の敵陣に當る爲めより、自國の安全第一の爲めである。支配階級が聯盟を裏切つて、外國で人氣のある主張を支持

しない場合でも、その根本は自國の利益と安全とにある。自由主義の看板をかけた支配階級の面々が、時としては、所謂侵略國を助けて、その犧牲國を捨てるのも、自國の安全、何よりも特權階級の安全が、左翼思想で侵されることを恐れるからなのだ。勿論ファッショが、英國の生命的權益を侵すやうな場合には、これに双向ふことは論を俟たない。

第二の根本原則は、大陸に於ける勢力均衡である。如何なる一國も、歐洲大陸に於て優越ならしむべからず、これが外交の金科玉條であつた。此の原則はヨーロッパ大陸に限つてゐたのが、十九世紀の中途になつてディスラェリーは、ヨーロッパに限らないことを明言してゐる。即ち世界の如何なる部分でも、大英帝國以外に勢力の平均を破る強國が現はれたなら、英國は直ちに其のバランスを、恢復する工作を始めるのである。史上ではフランス、オーストリアの對立時代には、初めはフランソアを捨て、カルルを助け、カルルの勢が強くなるとこれを押へて、フランソアの破產を修理してやつた。斯くの如くにして何時とはなしに、歐洲の『行司』となり、調停の鍵を握る指導的地位に就くこととなつた。その政策の變通性も此處から出發してゐる。

エリザベス女王は一生獨身で通した。然し其の情史の中には、フィリップ二世の求婚問題が

鮮かに殘つてゐる。恐らく心中彼の手を斥けることを悲しんだに相違ない。然し此の結婚によつて大陸の一國が、遙かに群を拔いて强くなる恐れがあつた。女王は女性共通の神經質、癇癪、薄志等を示してゐるが、故意にこの求婚を斥けたものとすれば、それは英國國策の根本方針に依つたものであらう。降つて十九世紀のフランスの强大に對する押へとしては、イタリアを盛り立てた。內部には革命、外では權謀、これがパアマーストンの政策であつた。ベルリン會議に先だつて、ソールズベリは多くの密約を作つた。英土密約が基になつてサイプラス島が今日は地中海の東方で、儼然たる英領の要地になつてゐるが、如何なる理論からもこれを英領にする理由はなかつたのだ。全くイタリア人を追出すのがその根本の目的であつた。ベルリン會議に於けるディスラェリーの最大の功績は、此の勢力均衡の信條に飽くまで奉仕したことであつた。三大帝國の結合を永久に防いだのも、彼の功である。三帝同盟（ドライ・カイザー・ブント）は一寸は出來上つたが、ディスラェリーの政策で、露佛の接近がこの時に萌芽を示し、ビスマルクにとつても、オーストリアと結ぶには、ロシアを捨てない譯にはいかなかつた。

英國がエヂプトを保護領とするに至つたまでの經緯は、不信と欺瞞とに滿たされてゐる。是は外交史家の悉く一致するところである。然し、これらの不信にも一貫した根本の主義はあつ

た。それはアフリカ及び近東に於けるフランス、ドイツ、イタリアの何れをも、優越ならしめない政策の命ずる所だからである。ロオズベリーから、ソールズベリ、降つてホーア、イーデンにいたるまで、言ふ文句は異なつても、何れも帝國主義の生え抜きの使徒でないものはない。對立した帝國主義の相剋を見た時に、現實の要求と、既成事實とに最大の重點を置くのが、英人心理の樞軸である。如何なる場合にも、緩急輕重の別は誤らない。これが英人の常識だ。ロシアが旅順を、ドイツが膠州灣を取つた時にも、少しも爭はずに、自らは威海衞のやうな貧弱な所で我慢した。歐洲自身が不安な時に、支那の主權の爲め、この二大强國を向うへ廻すの愚をさとつたからである。此の心理を例示する興味ある史實は、ファッショダ事件のときのソールズベリのエピソードである。

ファッショダでキチナー元帥とマルシャンとが、間一髪の危機に逢著したのは、人も知るところである。そのときロンドンにあつた佛國大使ド・クルセルは外相ソールズベリを訪ねて、滔滔とパハル・エル・ガザルに於ける佛國權益の正當なことを述べ、論理透徹、措辭典雅、まことに外交雄辯の典型であつた。默つて聞いてゐたソールズベリ卿は、相手の言葉の終るのを待つて、Oui, oui, vous avez raison, mais il faut vous en aller (左樣、御說は尤もだ、でもあなた（佛國）は出て行くのだ）と言ひ放つた。全く英國外交の心臟の强さを如實に語つてゐる。

エヂプトを我物とした外交史を辿つて見ると、ソールズベリにしろ、グレーにしろ、事件當初の理非曲直は全く別にして、現實の事態に卽して、英國は執拗にエヂプトに、スーダンを恢復してやつた努力に對する報償を求めてゐる。トルコの宗主權もフランスの優先權も、英國に取つては机上の空論以外の何ものでもなく、英國の當面の緊要事はスーダンを英埃共同領域（コンドミニウム）とすることであつた。スーダンの英埃共有は英の方にアクセントがあるので埃の語は聞えないと言はれるほど、英國領土化してゐる。最近の英埃條約までは、エヂプトは自國の官吏も軍人も、その「共有地」へ入ることすら禁ぜられてゐた。

『光輝ある孤立』といふのも、この列强均勢の根本國策から來た必然の結果であつた。大陸政局の流動狀態から來た不愉快なる必要であつた。主義として同盟國を造るのに反對がある譯ではない。ソールズベリは前記の英土同盟の密約を結んでロシアに對抗した。又イタリアとは海軍祕密協定で地中海の現狀維持を約してゐる。彼の外相時代に英獨同盟は四度までも議に上つてゐる。ジョセフ・チェンバレンも同說で屢々實現の氣色（けはひ）を見せた。

この孤立が完全に破れたのは南阿戰爭のときで、その結末の最大の表現は日英同盟であつ

た。此の同盟に日本よりも英國の方が、より以上に熱心であつたことは證迹蔽ふべくもない。

○

この變通窮まるところなき國策、事態に即して國權を伸暢する實勢力の樞軸は何處にあるか。大英帝國を動かす原動力の發電機構は何であるか。

憲政の發祥地、自由思想の母國、言論自由の總本山、である英國の國策は輿論が造ると考へるのが我が國などの通説であるらしい。現代の英國を見て議會政治、民主政體の典型と考へるのは、浮べる氷山を見て、隱れたる氷塊の大きさを知らぬのと一般である。

現代の大英帝國は一種のファッショで動いてゐる。勿論イタリアの意味ではない。人も知る如く、その國策の搖籃は三大勢力の結合にある。曰く海軍、曰く財界、曰く官僚、此の三者である。無敵海軍のことは言はずもがな。航空機の發達で足許の危くなつた地中海の海軍も、イタリアとの地中海協定、大空軍の建造で持ち直したこと、人の知る通りである。

財力經濟力(シティ)を代表するランカシアと英蘭銀行が、資本主義のチャンピオンとしてその國策の動きに重きを爲す。一年二千磅以上の所得あるもの約十萬人で國民取得の一割六分を占め、下院の議員百七十人は六百五十會社の社長の椅子に坐つてゐる。上院議員も大多數は、大地主か、大資本企業の社長重役かである。日本商品が世界市場に氾濫して、ランカシアの煙突が青い息を吐くと、瞬く間に大英帝國の息のかかつた國々の隅々まで、日貨締出の方策が行きわたる。英國自身がフランスの爲替補償稅は最惠國條款違反として大いに反對した。その舌の根の乾かぬうちに、エヂプトに說いて、日本品には爲替補償稅四割を賦課させる。支配階級の大部分がシティの財力と搦み合ふ。日支事變の最大衝撃は、英人の安全よりも長江流域の商權、別してはユダヤ財閥に合流して浙江財閥を支持する原動力、二千萬に餘る香上滙銀の銀の準備の存在である。この銀が支那では正しく大英帝國の三大支柱の隨一たるシティを代表するのだ。

○

外交の舞臺裏は固より外務省である。近時の日本では外務省は扱ふが、外交國策は定めて居ない。英國の外務省は時に消長こそあれ、特に一九〇五年の機構改正以來は、外交政策の根本を練り、專門家の智腦を絞つて、政治家をしてこれを斷行せしむる策源地になつてゐる。

英國の文官制度即ち官僚は歐洲では古から讃嘆の的であつた。其の廉直に於て萬邦比なしと

言ふ。國際聯盟が事務局を創めたときに、初代の事務總長ドラモンドが英人だつたためのみではなく、英國式文官制度に型どることに、何人も異議はなかつた。堅固不拔の文官機構は二十年も三十年も勤續の專門事務官の集合である。事務次官のサー・ロバート・ヴァンシタートは全く官名の如く恒久（パーマネント）である。後年大使として令名のあつたサー・ジョン・ティレーも久しく通譯官出身の高級書記であつた。大戰後の平和會議で令名を馳せたサー・モーリス・ハンケー（後の內閣及び樞密院翰長）も同じやうな記錄係であつた。

いづこも同じ、外務省だけが以前は官僚部內の溫室で多少の異例を留めてゐた。是が一九〇五年に他の各省の範を調べて大改革を加へ、更に降つて大戰前後の必要で益々機構の充實を計つて今に至つてゐる。

このファッショの一支柱たる官僚の築き上げた國策は如何なる政黨も動かすことは出來ない。勞働黨の榮華の極みだに、あのシンガポールの防備增設を延ばしただけで、一指を染めることも出來なかつた。外務大臣も固よりこの吏僚の手中にある。屬僚は恒久だが、大臣は長くて三年か五年だ。彼等は專門家だが、彼はやや知つてゐるアマチュアに過ぎない。世界の舞臺の表裏に動く一切の情勢が、晝夜を分たず電波に乘つて、機械の如く正確謬なき吏僚の頭を廻轉させる。かくの如くにして百年不動の傳統は形づくられる。英國は聯盟中心の外交だなどとセシル卿やリットン卿の平和論を、額面の通り評價した日本の外交通はもう眼を醒してもよい頃だ。恒久屬僚の亘頭ヴァンシタートやハンケーが、聯盟を兒戲に類すと夙に成立當時から心中では輕く扱つて居た。

勿論英國外務省にも聯盟局はある。又聯盟の信者も若干はある。これは丁度酢の味を利かせるために、混ぜた砂糖ほどの役には立つてゐる。英國外交を聯盟中心主義と考へるには凡そ緣の遠いものである。イタリアが終に聯盟を脫退しても一寸眉をひそめるだけでおしまひだ。

外交の基調が平和主義でも自由思想でも、將又左翼容共でもないことは、事實が最も雄辯に語つてゐる。グラドストーンは外交の六大原則を設けたが、第一條は帝國の國力を增進し、有事の日に備ふべきこととあつて、外政の第一義は自國中心の世界觀に出發してゐる。殘る五條は聯盟規約の精神を豫言したやうなお題目であるが、英國の行つたところは凡そこれとは遠い現實外交であつた。歷代の外政官僚の底を流れる思潮は帝國主義と保守主義との都合よき協奏に外ならない。英國の參加したあらゆる戰爭を見よ、エチオピアを見よ、パレスチンを見よ、スペインを見よ。飜つて近き將來の支那に於ける英國を見よ。

官僚は素より階級的機構だ、恰も英國國教の正公會の機構に似てゐる。その頂點に在る大僧正が主權者である。立憲政治の發祥地として英國では今でも『君主は統して治せず』の信條を理論では墨守してゐるが、事苟くも外交に關しては、史上の實例は屢々此の原則を裏切つてゐる。

ヴィクトリア女王の英邁と女性氣質との交錯から英國の外交は屢々進路を更めてゐる。大公使の任命にも女王の好惡から關與された事實があり、歷代の外相は自說を通すのに骨が折れた。女王と閣員との間に交された多くの書簡がこれを證明してゐる。普佛戰後一八七五年、ビスマルクは佛國の復讐に先んじて、再び起つ能はざらしむるまで叩きのめす意志を持つてゐた。カイゼルとツアルとに親書を發して、これを思ひ止まらせたのが女王であつた。

女王は重要な文書に一々目を通して勅許の旨サインをされた。Appd. V.R. & I.（裁可ヴィクトリア王及帝）とある。從つて急を要する電訓などには「陛下後伺」（in anticipation of the Queen's approval）と書いてあり、御裁可のない場合は取消すのであつた。

日淸戰爭の際に英國が大轉向をしたのは今では知らぬものはない。當時の女王に就いてティレー氏は面白い話を書いてゐる。氏は支那局勤務の書記であつた。或日應接室に婦人客が會見を求めて來た。受附では何人で何用か聞いても判然せぬとのことで、當然外國人と豫想して面會した。會つて見ると英語が通じて、その用向は日支間の戰爭を急速に止めさせて欲しいとのことだつた。ティレー氏は何氣なく「何れ調べて御返事しませう」とこの婦人の住所氏名を尋ねた。客は逡巡ややしばらくあつて、一枚の紙を取り出し、スラスラと Victoria Regina（女王ヴィクトリア）と書いたのであつた。

エドワード七世の親佛政策が、二國聯合か三國同盟かの岐路に當つて、大英帝國の進路は大轉換をなし、世界政局のコースを革めたのは言ふを俟たない。皇太子時代に侍臣にささやいて「予王たるの日は自ら外相を兼ねむ」と告げたが、實際は外相にならずに、親しく外政の大策を指導された。王位に敬順なることが、帝國諸領域をつなぐ所依（よすが）であつて、大英帝國の結束愈愈全しの觀があつた。「ウェストミンスター令」がこの事實を法律化した。祖父に最も似たと稱せられた天性の外交家エドワード八世（今のウィンザー公）の退位が、この大英帝國結束法を理由としてゐるのは、まことに運命のアイロニーである。

斯くの如く外交の大策に關する限り、英國の主權は議院にはない。勿論二大政黨交互に多少の國策を更めた例は無數にある。併しバルフォア卿のユダヤ鄉土建設の宣言も、ロイド・ジョ

ージのアラビア獨立の三枚舌も、政客の非難を受けながら、如何なる内閣でも曾て英帝國の重大權益に反する事項を政爭の具にしては居ない。

官僚の獨裁の例の中でもソールズベリは特に甚だしかつた。一八七八年伯林會議に先立つて、列強に出した歴史的廻狀は、三月廿九日の夜十一時から、三十一日の朝の三時まで、戸を閉ぢて、獨りで起草したものであつた。勿論それまでの材料は悉く屬僚の頭を絞らせたのだ。この廻狀案を閣議に出しても、ソールズベリの威容嚴として何人も仰ぐものなく、閣議は僅かに代名詞一つを置き換へて無事通過した。

爾來の大臣にも獨裁的な例が多數にあるが、近時の外務省では、屬僚はその扱ふ事件については、かなり下級員までも、各自の意見のまま、案件の利害得失將來の見通し等を附記して上局に出す例になつてゐる。部内の衆智を蒐める慣例は昔もあつたが、ソールズベリなどはひつこいとして嫌つたとのことだ。

○

水も洩らさぬ外交官僚の例證として、機密の洩れぬことも世界で最高と稱せられる。無國籍のものや、政治や商業の關係で英國の旅券を欲しがるものの多いのは、明かな事實であるが、世界の旅券で最も買收し難いものが日英兩國の旅券である。

暗號などの取扱は大戰で一變した。英國外務省は早くから呑氣な暗號や機密信の窃まれることを豫想して居た。又公表文集のブリュー・ブックに往復文書などが平氣で載せられ、原文の暗號を解讀する鍵を與へてあつたことも屢々であつた。米や露に限らず、英國外務省にもむかしから暗號解讀の專門家はあつた。十八世紀には世襲の暗號讀みの家柄にバース・エンド・ウイルスの監督（ビショップ）などと云ふのが居た。

機密の洩れぬこと、官吏の買收瀆職の稀なることは英國の誇であつた。

史上に殘る外務省の機密漏洩の双璧は、ソールズベリ時代の英露協定事件と最近のマッフイ委員會報告（アビシニア調査）とである。一八七八年英露密約の本文を淨書した書記にチャールス・マーヴィンなるものが居た。淨書のままに全文を記憶して、「グローブ」新聞に賣り、「グローブ」は特種として世界の鼻をあかしたのである。起訴されたが、現行の機密法のなかつた時代で無罪となつた。上院で質問された時にソールズベリは無根と答へた。幸にコピーに誤記があつたので、外相は僞を言つたことにはならなかつた。

マッフイ報告のことは餘りにも生々しい事實だから省いて置く。世人は英國外交官僚の堅陣

に鰐の入つた一例と論じ、動もすれば大英帝國の衰運を豫斷する證左に使ふが、この判斷は早急であらう。

○

英國外交の大策が當面の事態の要求に卽したリアリズムに出で、その變通無碍の舞臺裏に動く外交官僚、これを支持して踊らせる海軍と下町（シタイ）の結合の存在する限りは、極東に於ける國際情勢の支點を占めんとする英國の傳統政策も看取するに難（かた）からぬのである。

聰明の黃昏

放送も、出版も、街頭も、軍歌に詩吟と軍國ドラマのターブル・ドートで、流行唄などの影をひそめたのはうれしいが、文化的活動が一時休止狀態にあるのは、わが國の大をなすゆゑんではあるまい。日露戰役は音樂としては『赤い夕陽に照らされて』を殘しただけで、文化的所産は二三の戰爭記述の外何もなかつた。今日もおよそ藝術にも文化にも緣の遠い軍歌や行進曲の氾濫があるだけで、國民精神の琴線に觸れて百世のもと懦夫を起たしめるものは未だ出て來ない。

日支事變は、日本の國運にとつては、滿洲事變以上の試煉だ。この戰後の想像に餘る多艱な國步を導くのに、何よりも緊要なのは高い聰明であらう。そして剛健で、內容の充實した、一步一步大地を踏みしめて進んで行く國民氣魄であらう。そのためには、精神的文化的準備が、今から工作されねば結局は國家的にも、勘定合つて錢の足らない結果に終るだらう。

世界を通じて、政治家などには聰明の黄昏でもある。中でも日本ではメディオクリテしか見出せない今の職業政治家に比べたら、學者や文士や技術家は、もつたいないほど上等だ。その文化人がこの重大時局に、大切な職能を發揮させられないのは、わが國の前途のために、いくら憂へても足りないことではないか。

支那人といふものの認識も、今日ほど緊切な時はない。戰線からのルポルタージュは、勇士たちに絶大の感謝を捧げさせる效果はあるが、一事一物を叙しつつも、支那人について、もつと認識を掘り下げて、國民に教へるものがあるべきではないか。ニュース映畫なども、あまりに平面的に過ぎる。序に噂の如く、映畫『大地』が禁止されるのが眞(まこと)なら、惜しみても餘りある。世界で名作と折紙をつけられた作品が、支那人の殘忍性を示す場面の故に、わが士氣に影響する懸念があるものとは考へられない。またいくらもカツト出來るはずである。(尤もその後『大地』は許可されたが)

すべて『大地』以下の三部作は、近頃市を賑はしてゐるいはゆる支那通の際物出版より、どのくらゐ眞の支那を知らせてくれるか。恰もハルト・ミッションのアジア横斷が、記錄も映畫も、期せずして間接に日本の立場を世界に説明してくれたと同じく、また林語堂の『我國土及び我國民』が、現代支那の指導者に對する反感で(そのために自國の支那では發禁である)多少の偏見はあつても、少くとも英語國民に如何ほど日本の行動を理解させるに役立つてゐるか。

支那を知る我が文化人が、この際こそ、これらの述作にも優る實相支那を、國民にも世界にも教へて然るべきだと思ふ。

大臣の學力

——第一次近衛内閣のとき——

國家總動員法といふやうな劃期的な重要性をもつ提案に對して、近衛首相が衆議院に提出の當日、病氣のため陣頭に立てなかつたのは返す返すも遺憾である。幸ひに去る二日から登院したのは、せめてもの「リカヴァリショット」であつた。

外相は副總理のやうな資格で、案理由を說明したが、この說明はホンの形式で一分間で終り法案の內容についての答辯を法制局長官に讓つた。これは我々政治に對する門外漢から見ても不可解の仕打ちである。議員がこれを受け入れぬのは初めから豫想出來たのだ。國民はこの一事で政府の心事に多少の疑ひを持ち出した。

○

我々に更に不可解なのは、あの簡單な憲法論は法律家法相を俟つまでもなく、閣僚の何れの一人でも立派に討論に應ぜられる程度のものなのに、何故に外相が矢面に立たなかつたかと云ふことだ。首相も同じく法科出身であるから出席して居たなら、恐らく此の議論に當つたのであらう。去る二日以後の首相發言はそれを示してゐる。また質問者の齋藤、牧野、池田、三君などの議論も、法相の解說も、その後の憲法論も、さほど法律の專門知識を要する程のことはなく、普通の法律書生の試驗勉強に出て來る問題ばかりである。況や首相のほかに外相、文相、藏相、商相その他、皆法律で高等試驗を通つてゐる優秀な人達で、まさか合格したらば直ぐ法律學を忘れた程の豪傑でもない筈である。

○

もう一つ、池田君が記憶してゐた如く、この問題の憲法論の中心は、數年前の六三問題即ち臺灣の律令問題として、年配から考へてもこの閣僚たちの耳に蛸の出來るほど議論された筈のものである。大臣の學力が足りない爲めでは斷じてない。併し法律の試驗を文官の登龍門にする明治以來の制度の根柢はこの一例でも搖り動かされた譯である。

想ひ起すのは筆者がまだ年少の屬僚であつたころ、問題は忘れたが、當時の內相で間もなく首相になつた原敬氏と、憲法論を戰はせたことである。原氏の法律の學力は決して今の閣僚に勝るとも考へられなかつたが、當時殆ど學校を出たばかりの、黃口乳臭の青年と、法律論を上下した意氣と誠實とに至つては筆者を深く動かしたのである。

今の大臣は學力は足りるのであらう。この非常時局に處して行く熱誠は少くともこの法案の取扱ひ方から見ると、稍不足してゐるのではあるまいか。

もし政治的駈け引のため、政府側は當初法律家以外には喋らせない作戰であつたにしろ、氣字の矮小、到底重大時局を委ぬるに足らない。我等はこれを信じないものである。

勘の惡い歐米人

日本人が語學が下手だといふことは、國辱でも何でもない。或る意味では國威ですらある。これを國辱と考へる方が、眞の國辱であらう。英佛人が英佛語以外の語學に通ぜぬからといつて、國辱を感じた例などは絕對にない。

○

併し、物を言ふのは解つて貰ふためである。解つて貰つてゐるつもりで、少しも理解されない發言をするのは、發言者の地位に依つては國辱であらう。日本の海外放送のあるものは、放送者の語學の未熟なために、少しも通じないと、海外の友人から屢々書いて來る。

曾て聯盟で滿洲問題討議のとき日本のさる代表の演說を、列國の新聞は悉く語學の點で惡口を言つたが、中にも英國の「ニュー・ステーツマン」は、「由來日本官吏の外國語は拙劣難解を以て鳴るものではあるが、今回の如く甚だしいのは日本としても前古未曾有だ」と言つた。上

海工部局に日本吏員を參加增員せしめない理由として、英國側は日本人の語學に通ぜざることを擧げたと云ふ。（外國語を學ぶ學生數では日本は世界一である）

からなると國辱でないまでも、國威では はなくなる。隆々たる皇軍の偉勳を傷つけさへする。

○

よく考へると、言語などは抑も末だ。「石叫ばん」といふほどの熱誠があれば、吶吃でも人を動かすのである。日支事變でも、これほど公正な立場にある日本の公式聲明が少しも正解されないとすれば、歐米人の勘が極く悪いものと考へない限りは、發言者に誠意と信念との足りないためと考へるの外ない。

先年出た「ラウンドテーブル」に書いてゐる、或日本正解者が、日本政府の「支那人を敵とせず」「蔣一派の抗日を膺懲す」「日支提携のための爆撃」「日本は東亞の安定を志す、支那よ謬りを悟れ」といふ説明を聞いて、「官僚日本の物の言ひ方にはいつもながら愛想が盡きる。日本がこれほど立派な立場に在りながら、その言ひ分は全く正氣の沙汰とはいへぬほど、世界に通用せぬ道理をお題目のやうに繰返してゐる。こんな他人に通ぜぬ理窟を言ふやうでは、支那の主張の方が矢張り正しいのではあるまいかと思はせる位である」と評してゐる。

○

相手方に理解して欲しいのならば、相手に通ぜぬ論理や不可解の文章や發言を何萬遍やり直しても、いつまでも通じないのは明白だ。況や相手の勘所が外れてゐるにをいてをや。

同じ筆者は尙ほ曰く「日本ほど宣傳に全力を注ぎながら、努力の萬一の效果をも擧げないのは有史以來他に類例がない、日本の云ふことは味方を悲しませ、敵を激昂させるだけだ」と。

○

近頃は文化工作といふことが今更のやうに叫ばれる。文化アパート、文化猿股のやうな意味なら、又何をか言はんやだ。ところが世界を相手に日本精神や日本文化を理解させようといふ企のうちに、詩吟、琵琶歌、生花、盆石、日本歌謠などを麗々しい看板で押し出さうとするのもあるやうだ。不充分な說明付で、かういふものを示されて、あの「勘の惡い」歐米人が、日本精神の幾分でもを正解出來るだらうか。かうなると「勘のわるい」のは內外何れにあるか疑はしくなる。

東洋の認識

世界秩序のヴェルサイユ條約による體制の崩壞が、極東では滿洲事變以來、我が日本を原動力として著々進められ、今日は支那における聖戰に、この動きの目覺しい表現を全世界に提供してゐる。

○

眼を西の方に注げば、アラビア人を中心とする回教圈、インドに於ける國民議會、一としてこの崩壞に寄與しないものはない。

ムッソリーニは白馬に跨り、コーランを提げて、「我れアラビア人の中から第二のマホメットの現はるるまで、自ら姑くこれに代らん」と叫んで、東洋民族自覺の線に沿うて、舊體制の崩壞に續いて來るべき新時代の經綸を勇敢に行つてゐる。

○

極東における新體制の建立に寄與する大和民族の大使命の達成に先立つものは、東洋民族の正しい認識、東洋精神の誤りなき把握でなければならぬ。近頃アジア民族や、回教國民や、近東諸國などの情勢についての言論が、にわかに擡頭して、識者の關心を呼んでゐるのは、誠によい事ではあるが、言ふところの大アジア主義、東洋復興の言說は、多くは机上の空論で、まことにこれ等の民族の認識もなく、これに注ぐ眞の愛情をも感得することが出來ない。

○

尤も手近の證據は、こんな關係の座談會などに出席してゐるアジア人の姓名や資格すら、正しく書いてない。プラタツプ氏をアフガニスタン王、コレイラート氏を元警視總監といひ、トウフイク・エルシエリフをドウフイクドなどと、飛んでもない呼び方をしてゐる。內容の聞き違ひ、書き違ひなどは尙更である。もしこれらの國民が、日本の首相を「チカエ」と讀み、羽左衞門を「はねざえもん」と呼んだとしたら、その日本の認識は正しくこの程度である。北支蒙疆の回教徒にハムの御馳走をした話などは、全く微苦笑だけでは濟まされない。

○

これよりも更にひどい無識が半官的の情報として最近に現はれた。これは恐らく同一の通信によつたものだらうが、その結果、新聞といふ新聞が悉く同一の誤りを犯してゐた。曰く、新渡戸博士の「武士道」をアラビアとエヂプトとの二國語に飜譯して、文化紹介に資する計畫であると。或ひは文章語としての英語と米語とを區別する意味の、こまかい認識から出發したのかとも考へたが、それほどの事情通でもないのだらう。

○

東洋における何れの民族が何れの言語を用ゐるかといふが如き、大筋の極めて簡單な認識すら斯くの如し。十數人の國民使節が唯の一人も東洋民族の國々へ送られなかつたのも、この無識無關心と平仄が合つてゐる。

更生せんとする東洋の新體制に、今から逆行せんとしてゐるのが我が日本のやうにも見える。

文化統制の一問題

近頃不思議な出來事は、山本勝市博士と安部一高校長の著書が頒布を禁止されたとか、自發的に絶版するやうに申渡されたとかのニュースである。日本政府が有權的にこの兩氏を文化や教育の指導的地位に就けながら、同じ政府がその言論を好ましからぬものとするのは如何なる根據に基くものだらうか。これが文化統制の一つの處置であるなら、その責任者は何人であるか。

文化統制の必要は我々も痛感してゐる。併し學者思想家の片言隻句を捉へて著書の言論を抑制するやうな末梢的な措置は却つて人心を險惡にする。

文化統制において最大の急務は飜譯出版の嚴密な監督であらう。出版景氣につれて雨後の筍の如く出る飜譯物には、誠に無責任な誤譯と佶屈讀むに堪へない文章とが半數以上もある。これらは讀書人を謬る外に一種の詐欺と見てもいいくらゐである。文化の統制機關は飜譯書を悉

く草稿として査閲して、讀書界に出すべきか否かの許可制を採用すべきものと思ふ。

手近にある例を擧げると、「山の英雄」（改造社）「太平洋地政治學」（青年外交協會）「イランを繞る石油爭覇戰」（天元社）等その他無數にある。いづれも三行に一つ位の割で原文を誤讀してゐる。中には何のことか少しも解らない文章の連續がある。この最後のものは飜譯とは斷つてないが、正しくナハイ氏の佛文の逐語誤譯である。この譯者は驚いたことには、イランのことも、石油のことも、またフランス語をも心得てゐない（例へばガソリンの佛語を知つて居ない）。

文化統制が百害あつて一利もない末梢的な禁止抑制を企てずに、何よりも先きに我國の文運向上に少しも貢獻せず、貴重な紙の濫費に過ぎない無益有害の誤譯書に斧鉞を加ふべきではないかと考へる。

排外は國辱

對外情勢の深刻化するにつれて、いたるところに外國人排斥の聲に踊らされる無智の徒の暴行事件などを聞く。誠ににがにがしきことである。時々は歐米人の國籍と人種とを見わけられない邦人が、某國人と思つて亂暴を加へたら、それがドイツ人であつたり、甚だしいのは態々我國へ招いた某國使節團の一員の夫人だつたりして、本人も官憲も平身低頭、陳謝させられたりする。

英米に對する媚態外交の排斥すべきは、日本國民に一人も異議はない。併し何國人だらうがたとひ其の國家の政策が敵性を帶びて居やうが、平和な旅行者、無實な居住者を捉へて暴行するやうな低劣な國民が一人でも居れば、我が國威を傷つけることこれに如くものはない。我々は攘夷鎖國の時代を再現するほど蒙昧であつてはならない。

心理學者の説明を聞くまでもなく、外人に暴行を加へたりするのは外國崇拜の潜在意識から

出發してゐる。公正な心情の國民なら外國人に一目を置くやうな强がりをやる筈はない。排外は所謂『インフィリオティ・コンプッレクス』で、自尊心の缺如、相手方をえらいと見る前提から出發して居る。これにまさる媚態はない。

その證據には四年に亙る對支聖戰の間に、唯の一人の在留支那人をも迫害した例はないでないか。支那人を我々と平等又はそれ以下と見てゐるためである。これに反して支那人は抗日排日をやつて日本に二目も三目もおいてゐる。

外國語排斥にも同じやうな一面がある。如何なる外來語を攝取しても、國語は言靈の幸はふ日本のものである。況や『ダンス』と舞踊『ペーア』と梨と云ふやうに、巧に使ひ分けをする自然の發達が國語に在る。無理な譯語で代用するのは、外國語の力を恐れ、外國をあまりに高く評價することになる。ビスマークの國語純化はもつと深いもので、皮相な外國語排斥ではない。現代ドイツ語こそは外國語を最も巧妙に攝取してゐるものである。ドイツ人は歐洲では最も多く外國語に通じてゐる。

我が日本には排外の精神はない。上代にはしばしば敵性を帶びてゐた當時の朝鮮人の混血兒たる坂上田村麿を起用して、國軍の總司令官に任じてゐる。それでこそ八紘一宇である。現代の日本人が暗愚な排外行爲をやるならば、日本精神の正反對であり、國辱の極致でもある。

あとがき

太平洋に濤高く、明日の太陽は如何なる姿の世界を照らすか。萬人がいはゆる臨戦體制で緊張を極めてゐる。

かゝる折に氣の永い隨筆などを出すのを世人は批難するかも知れない。併し私に言はせると、かゝる折こそ落ちついて、おのが姿も他人の振舞も、世界の動きも心を込めて見さだむべきである。私の文章は折にふれた走り書ながら、一片耿々の志、世道人心に少しでも光を與へたいと考へて書かないものは無い。

此の意味で、私の長い間の官場飛脚生活の副産物たる此の隨筆集を、一人でも

あとがき

多く讀んで欲しいと思つて世に出したのである。

昭和十六年九月

笠間杲雄

青刷飛脚

昭和十六年十月五日印刷
昭和十六年十月十日發行
昭和十六年十一月三十日再版發行

著者　笠間杲雄
發行者　小田部諦　東京市日本橋區本石町三丁目六番地
印刷者　新里銳三郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　大日本印刷株式會社榎町工場　東京市牛込區榎町七番地

㊟定價二圓三十錢

發行所　株式會社六興商會出版部　東京市日本橋區本石町三丁目六番地　電話・日本橋(24)二五五二番　振替・東京八三一九六番　會員番號一四三五〇二番
配給元　日本出版配給株式會社　東京市神田區淡路町二丁目九番地

落丁・亂丁の際は直接發行所にてお取替へ致します

178
緑

著者既刊

沙漠の國（岩波書店）
東西雜記帳（中央公論社）
回教徒（岩波書店）

日本出版文化協會
第一回推薦圖書

隻手に生きる

陸軍省報道部推薦
菊池 寛氏・吉田 茂氏序

小川眞吉著

B六版 二五〇頁
スケツチ七十餘枚收載
定價一・八〇 〒一〇

ノモンハンの激戰に畫家の生命である右手を失つて失意のドン底から飜然更生を誓つて立ち遂に血に滲む苦闘を克服した著者の僞らざる記錄

916
871